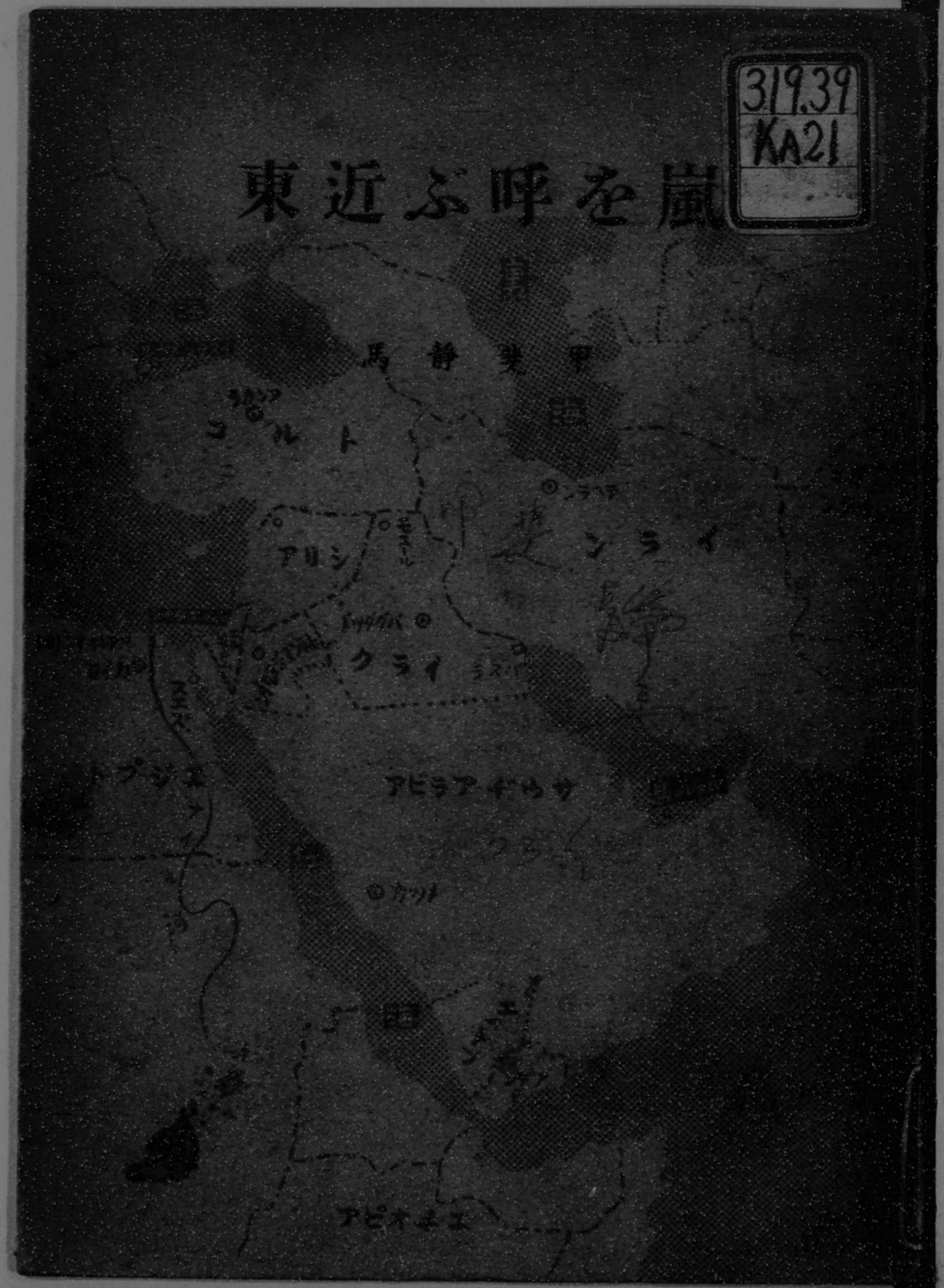
319.39
Ka21



0011070000

0011070-000

３１９．３９－Ｋａ２１ウ

嵐を呼ぶ近東

甲斐静馬・編

朝日新聞社

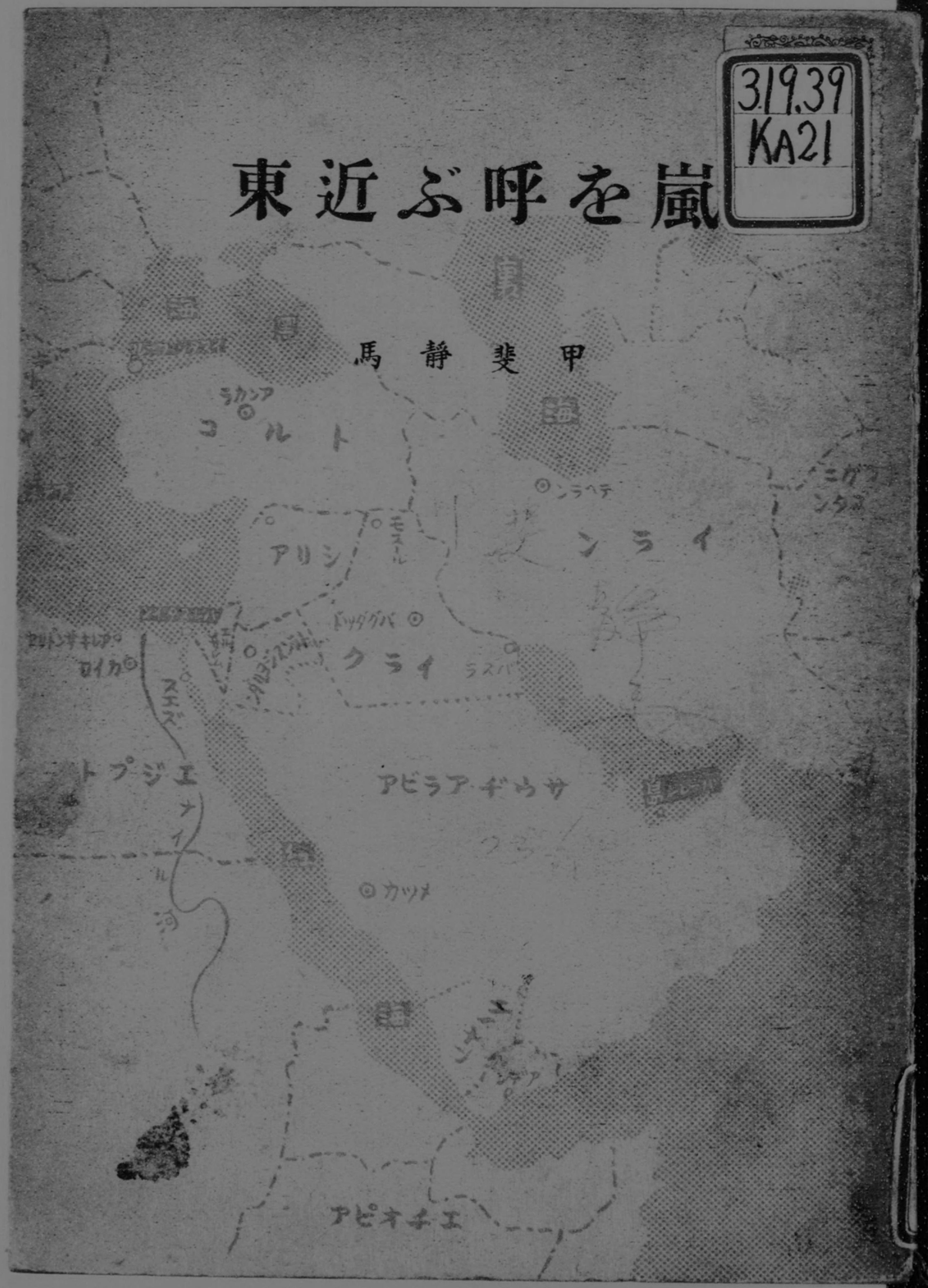
昭和１６

ABJ

319.39
KA21

東近ぶ呼を嵐

馬靜斐甲



納本

443

319.39
KA2/

東亜の嵐を呼ぶ近衛

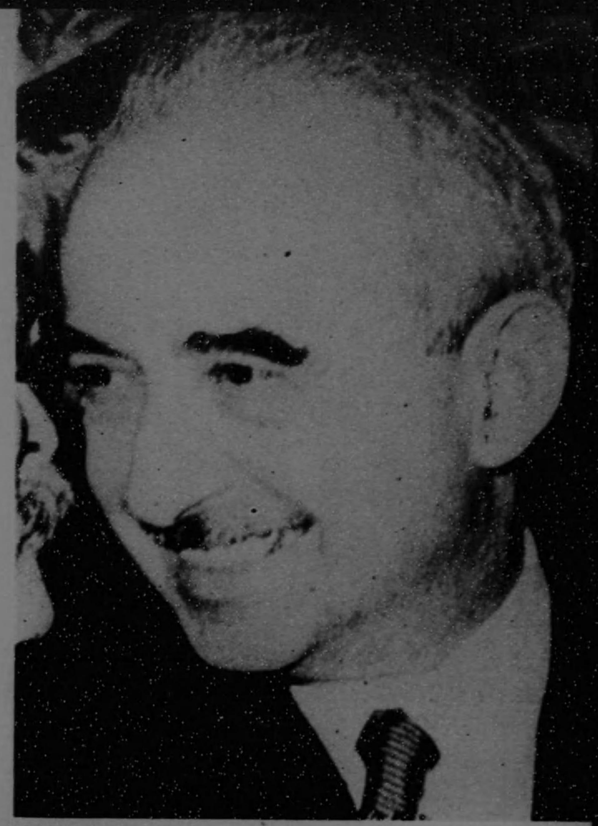
甲斐靜馬編

朝日新聞社刊
昭和十六年

爭奪の焦點

（下）管送油ノ間アフイハ・田油ルースモと（上）河運ズエス

近東を牛耳る人々

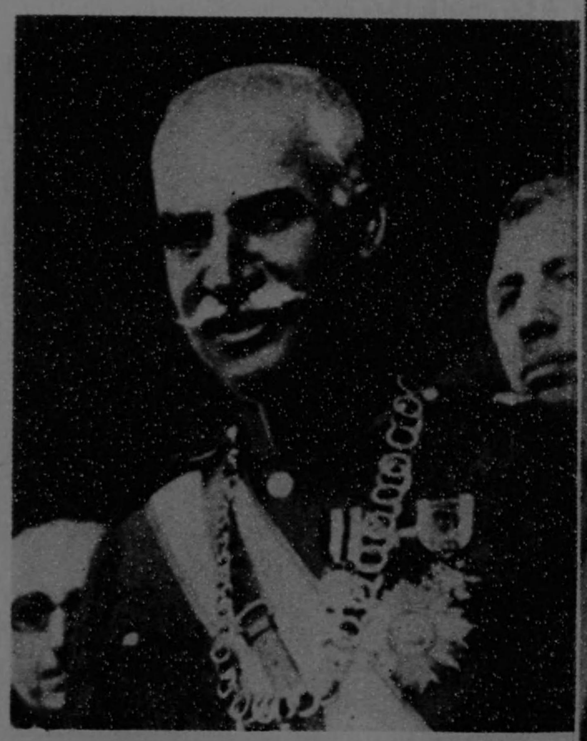


トルコ大統領　イノーニュ將軍

エヂプト・ワフド黨首ナハス・パシヤ氏

エヂプトのフアルーク國王

エルサレムのアラビヤ運動指導者
ダラド・マフティ氏



イランのパーレヴィ國王

サウヂ・アラビアのイブン・サウド國王

（上）北アフリカを席捲するドイツ快速部隊

（下）エルサレムの英駐屯軍を視察激勵する英外相アンデーイ

嵐を孕む

905
205

自序

近東――ダーダネルス海峽から東は印度國境に至り南はナイル河に至る部分は、從來わが國民によつて知られること最も薄き部分である。永い間の歐米崇拜熱から、歐米のことといへば、微に入り細を穿つて知り、或は知つたかぶつて得意となつてゐたわが國民の多くに、バルカンを語り、ルーマニアのカロルの政策を論ずる人はあつても、近東を論じ、サウヂ・アラビアのイブン・サウドを論ずる人の少なかつたのは不思議でないとして、最近の世界歷史の急轉回はわれ〳〵にかゝる態度を取り續けることを許さない。

本年三月一日のブルガリアの三國同盟加入、同じく三月二十五日のユーゴーの三國同盟加入によつて、バルカンはギリシア、トルコを除いて樞軸一色に塗り潰されんとするに至

つたが、ユーゴーの寝返りにより、戰火遂にバルカンに飛び、ドイツは四月六日遂に降魔の劍を抜き十二日間にしてユーゴーを降服せしめ、次いでギリシヤを崩潰せんとしてゐる。而して戰火が近東方面へ波及することは必至の形勢になつた。本書が世に出る頃、この方面の情勢が如何なる變化を遂げてゐるか、何人も豫斷を許さない。近東を知ることは刻下緊喫の急務である。

否、それぱかりでない。八紘一宇を口にし、アジア人種の盟主を標榜する日本國民として、同じくアジア民族であり、嘗ての日本と同樣に古き歷史の上に新しい歷史を接がんと努力しつゝある近東諸國の存在に無關心であることは斷じて許されない。日露戰爭によつて、極東における白人勢力を打破しアジア諸國に大いなる明日への希望を與へたる日本人として、當然これら諸國の希望をいにはり、生長させる責任を感じなければならぬ。この

責任を自覺せずしてみだりに八紘一宇を語る勿れである。

三國同盟によつてヨーロツパの問題は卽ち日本の問題となつた。しかし近東の問題はもつと深いつながりを我々に對してもつてゐることを知らねばならぬ。これはわれ〳〵自身の問題の一部である。

筆者が朝日新聞戰時特派員として近東の地に足跡第一歩を印したのは昨年七月中旬であつた。それはトルコであつた。これより十月末、イラクのバスラ港出帆、歸朝の途につくまで三ケ月餘、筆者は近東の鼓動の眞中で生活した。その間、筆者は目下世界の關心の中にクローズ・アツプされてゐるシリア、パレスタイン、エヂプト、イラク等の各國を訪れた。

本書は筆者の近東滯在の所産であつて、戰火漸く迫らんとしつゝある時、近東諸國が如何に動かうとしてゐるか、その原動力は何かと、出來得る限り平明に解說せんと試みたものである。問題の性質上、歷史的回顧にも相當のページを費した。筆者の努力は、宣傳的要素を排し、出來得る限り現地の情勢をありのまゝ傳へんとしたことにある。書中、印象記的部分が相當あるが、これはわが國民の大多數にとつて未知の世界である近東への手引きとしてわざとつけ加へた筆者の老婆心からである。

本書がわが國民の近東に對する關心を深め、近東理解に幾分でも貢獻することを念じつゝ。

ユーゴー降服の日　東京にて

著　者

目次

序論

バルカン作戰から近東作戰へ……三

第一部　近東、今日と昨日

一、嵐の前の近東……二九

二、近東における獨逸の地位……四九

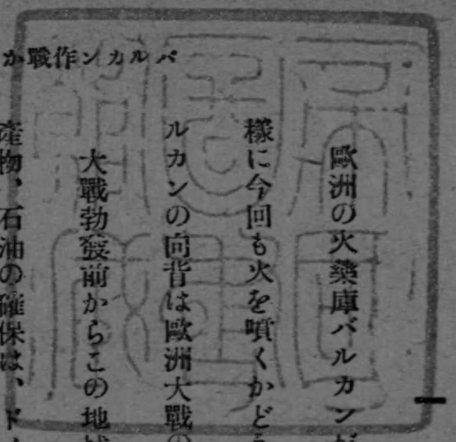
三、近東の再登場……六三

四、第一次大戰後の近東……七〇

五、列強の對回教政策……八一
六、汎イスラミズムか、汎アラビズムか……九七
第二部　トルコ、エヂプト
一、古きものと新しきもの……一〇九
二、トルコをめぐる列強……一三〇
三、トルコ滯在雜記……一四九
四、エヂプトの國內動向……一五九
五、「エスマー」の國……一七六
第三部　アラビアその他
一、アラビア國民運動の行違……一九七
二、イブン・サウドとワハビ運動……二一四
三、パレスタインの今日……二三八
四、爭奪の焦點、シリア……二四五
五、反英熱くすぼるイラク……二五四
六、新興イランの現狀……二六六

序論

バルカン作戦から近東作戦へ



歐洲の火藥庫バルカンが、今回の戰爭によつて如何なる變化を蒙るか、前回の戰爭と同樣に今回も火を噴くかどうかは、戰爭勃發以來各方面の多大な注目を浴びてゐた。蓋しバルカンの向背は歐洲大戰の歸趨に極めて重大なる影響をもたらすにはゐないからである

大戰勃發前からこの地域に最も重大なる關心を有してゐたのはドイツである。こゝの農産物、石油の確保は、ドイツの戰爭遂行に必須不可欠である。ナチス政權確立以來、ドイツが最大の努力を傾注したものの一つは、バルカンに對するその政治、經濟力の浸透であつて、ドイツの工業製品とバルカンの原料を物々交換するバーター・システムは著しい成

功を收め、同時にドイツのバルカンに對する政治的影響も著々强化された。特に一九三八年のオーストリア併合、翌年のチエツコ・スロヴアキア併合は、中歐、バルカン方面におけるドイツの地位を不動ならしめた。さうして大戰勃發以來、ドイツはこの强力なる既成地盤の上に立つて、バルカンの和平維持に不動の決意を示した。

一方英佛は、このドイツに死活的重要性を有する地域に對し、何とかして往年の地位を維持せんとし、戰雲濃化とともにトルコとの接近、ルーマニア、ギリシアに對する一方的領土保障を通じて躍起の活躍を示し、大戰勃發後には、ウエーガン將軍麾下にシリアに十數萬の軍隊を集結し、近東の防備を固めると共に、場合によつては何時でもバルカン方面に武力干涉を行はんとする體制を整へた。而して右の獨、英佛兩陣營のほかに、ソ聯もこの地域に著しい關心を示し、大戰勃發後、永年の疎隔を清算し、民族的紐帶を通じてブル

ガリア、ユーゴーと急速に接近、その勢力伸張の好機をねらつた。

かくて大戰勃發から西部攻勢までは、この三者の力の均衡の下に、バルカンは危げながら平和を維持した。蓋しこの期間の基本形勢はバルカン攪亂に最大の興味を有する英佛がこの地域において軍事的冒險に出るだけの實力を具備するに至つてゐなかつたことを擧げねばならぬ。而してこの基本形勢はその後もずつと續いてゐたと見るべきである。

フランス敗退によつて、ドイツが西ヨーロツパにおける覇權を確立するや、その影響はバルカン方面においても甚大で、ドイツは從來の地位を更に强化し、英佛勢力の衰退は歷然たるものとなつた。しかるにソ聯は、ドイツが對英作戰に注意を奪はれてゐる際に、多年の宿望たる舊ロシア領ベツサラビアを回復、これと同時にその西方に連る北部ブコヴイナにも進駐した。これに對しドイツは、ハンガリー、スロヴアキアと並びルーマニアをも

日獨伊三國同盟に加盟せしめたる後、ルーマニアに進駐を斷行、同國の石油資源を確保するとともに、バルカンにおける地位を一層強化した。

ドイツのルーマニア進駐によつて、バルカンにおける樞軸の覇權は一應最終的に確立したものと見られたが、その後イタリアがリビア作戰と呼應してギリシアに對して軍事行動を開始するや、イタリア軍の進出意の如く進ます、そのため折角確立したバルカンにおける樞軸の覇權に好ましくない影響を及ぼし、ドイツとしてはイタリア救援のため何等かの手段を採る必要に迫られるに至つた。かうして一九四一年三月はじめのブルガリアの三國同盟加入、これに次ぐドイツ軍の同國進駐斷行となり、ドイツとしては武力を背景とする無言の壓力によつてギリシアに威壓を加へ、伊希戰爭の收拾を圖つたのであるが、それが未だ奏効しない前に、ブルガリア進駐の威力によつて一旦三國同盟に調印したユーゴーが

調印直後寢返りを打ち、こゝにドイツとしては止むに止まれず、實力發動の擧に出で、大戰勃發以來維持されて來たバルカンの平和は遂に破れ、バルカンが動亂の巷と化したのはドイツ從來のバルカン和平維持政策に鑑み遺憾であつた。

二

ユーゴーが何故かくの如き背信的行爲に出たか、その理由としては、同國の複雜なる國內の諸對立のほか

（一）　イタリア軍に對するギリシアの善戰

（二）　東地中海、北阿方面における英軍の優勢

の二つが擧げられるであらう。もしそれまでにイタリアのギリシア並に北阿における作戰が好調であつたなら、ユーゴーの反樞軸的態度に出る可能性は全然存在しなかつたと見ら

れる。

かくてドイツ軍は止むに止まれず降魔の剣を抜いた。多くの人々の豫想では、山嶽地帶の多いユーゴーの特殊な地勢、並にブルガリア、ギリシア間の險岨な地形から見て、ユーゴー、ギリシアを含むバルカン作戰は、平坦なる土地と最高度に發達した交通網をもつ蘭白、北佛の作戰とは本質的に異り、從つて相當時間を要するのではないかとしてゐた。現に作戰開始當初はドイツ當局すらバルカン作戰の特異性を強調し、過度の樂觀を警めたほどである。

しかるに一旦作戰が開始されるや、ジークムント・リスト將軍麾下の精銳なるドイツ軍は、困難なる地形にも拘らず、その機動性を遺憾なく發揮、これと共に敵の弱點を衝く巧妙なる作戰は西部戰線と同樣こゝでも素晴らしい成功を收め、進擊開始僅か十日足らずで

ドイツ軍は

一、北部ユーゴーにおいては、ユーゴー首都ベルグラード、クロアチア首都ザグレブ、スロヴエニア首都リユブリヤナの諸都を占領

二、中南部ユーゴーにおいては、ヴアルダル溪谷を一氣に突破してベルグラード＝サロニカ鐵道の要衝スコプリエをつき、更に西進してアルバニアにあるイタリア軍とオクリダ湖附近において連絡を完成、ユーゴー、ギリシア間の陸路による連絡を遮斷

三、更にギリシア戰線においては、ギリシア、トルコ間のモリツツア溪谷を突破してエーゲ海の要地を占領、希土兩國間の連絡を遮斷するとともに他方スツルマ溪谷からヴアルダル溪谷に出で、ギリシアの戰略的要衝サロニカを衝くことに成功

英國はドイツのブルガリア進駐後、エヂプト、パレスタイン駐屯の近東軍の兵力を一部

割いてギリシアに上陸せしめ、そのまへ一九四〇年十月イタリアのギリシア作戰開始とともにクレータ島に根據地を進めてゐた英海軍、空軍と協力し、ドイツのギリシア攻撃に備へた。陸上において英國がドイツの敵でないことは、最初から各方面で豫想されてゐたのであるが、愈々蓋を開けて見ると、豫想以上にもろいことを暴露、特にこのバルカン作戰と並行してスエズ進撃のリビア作戰が強力に押し進められるに及んで、ギリシア上陸の英軍を著しく牽制、結局英軍としてはダンケルクの二の舞を踏むことが必至となつた。

三

バルカンにおけるドイツの電撃作戰は、その當面の目標として

一、伊希戰爭の收拾

二、歐洲大陸の制覇完成

を目指すものであつた。右の第一は純然たる防禦的性質のもので、第二は從來のバルカン支配を一歩前進する意味において積極的といへるが、從來とてもドイツの經濟的支配は絶對的なものであつた事情から見て、それが成功しても、ドイツ從來の地位にそれほど大きなプラスを加へるものではない。バルカン作戰の成功によつてドイツの得たものはこの直面目標のほかにある。卽ちバルカン作戰の眞の積極的な意義は、英國抗戰の牙城である英國の東地中海支配に對する爭覇戰においてドイツの地位を著しく向上せしめた點に見出さねばならぬと考へられる。つまり東地中海爭覇戰の一部として見た場合、はじめてバルカン作戰の眞意義が判然とするであらう。而してこの作戰により、ドイツがギリシアを占領し、エーゲ海に進出したことは、今後の作戰から見て極めて重要な收穫である。

東地中海の爭奪が如何に歐洲戰局將來の發展に重要であるかは、次の事實によつて何人

の眼にも明らかであらう。即ち英國としてはこゝを保有してゐることは

一、ジブラルタルの保有と相俟つて地中海の東西兩關門を支配し、獨伊をアフリカ、近東方面から遮斷する

二、アフリカ、近東を經て英本國と印度、濠洲方面との連絡を確保する

三、エヂプトの棉花のほかイラクの石油（英帝國または英帝國支配下の諸國における最大の石油資源でモスール油田を中心として年額約四百五十萬トン、油送管によつて目下地中海岸のハイファに送られ地中海艦隊の燃料となつてゐる）を押へて抗戰能力の維持を圖り得る

のであつて、いはゞこの東地中海支配は英本國防衞のため東方外廓防備陣地であるとともに、英國の寶庫印度防衞のための西方外廓防備陣地と稱して差支へないであらう。

更に獨伊側から見れば、東地中海を押へることは

一、エヂプトの棉花と相並び、イラクの石油を押へ長期抗戰に必要なる體制を完成し得ること（ルーマニア石油年額七百萬トンにイラク石油を加算すると、ドイツの戰時石油所要量千二百萬トン乃至千八百萬トンの大部分を滿し得ることになる。ルーマニア石油のみではドイツの平時所要量、約六百萬トンを滿し得るのみである）

二、エヂプト、伊領東アフリカを通じて印度洋岸に出で、更に舊獨領東アフリカとの聯絡も完成され、更に近東を押へることによつて英國の死活的連絡據點を奪取し、印度を抑へる道も拓かれること

等によつて、長期戰に對する鐵壁の構へを完成すると共に、英帝國の心臟に致命的なる一擊を加へ得るであらう。

かくて東地中海作戰の重要性はいくら強調しても強調し過ぎることなく、換言すればこが獨伊の最も手近にある英帝國のアキレス腱といふことが出來るであらう。特に西部、卽ち英本國において決戰が早急に行はれないとすると、東地中海がどちらの手に在るかが歐洲大戰の進展に決定的な意義をもつであらう。卽ち獨伊としては、東地中海を奪取したら、現在までの勝利を決定的ならしむるであらうし、また英國としては、こゝを失つたら抗戰の前途に對して致命傷を受けることになるのであるが、特に、一九四〇年夏フランスが屈服して以來、折にふれて今にもやりさうに見えて、その實なか〳〵實行されないドイツの對英上陸作戰が、容易に實行されないとすれば、東地中海の情勢の重要性は更に增大する。上陸作戰が果して實行されるか否かは現在までの情勢では判斷困難であるが、兎も角、ドイツが英空軍を全滅せしめるに至つてゐないこと、英國海軍が依然として健在で闘

志滿々であることは、上陸作戰が多大の犧牲を伴ふ極めて困難なる作戰であることを意味し、ドイツとしてはほかに全く手段がなければ兎も角、かゝる危險率の多い作戰は容易に行はないであらうことを示唆するものである。卽ちドイツとしては、英國に對して一方で空襲戰、他方で活潑なる潛水艦戰を行ひ、その抗戰力を破壞し、且つ補道を斷つてジリジリ痛めつけるとともに、他方東地中海から英勢力を追拂つて英國の抗戰體形全體に對して致命傷を負はせるといふのが、最も常識的な戰略ではないかと推定される。

かうなれば、東地中海作戰は、對英上陸作戰に至るまでの一つのエピソードと輕く見るわけには行かない。兩陣營の事實上の決戰と見なければならぬ。勿論天才的戰略家であるヒツトラー獨總統が如何なる作戰を企圖してゐるかは、我々には判らないのであるが、少くとも常識的に考へると右のやうな筋書となり、從つてこれを基礎として考へるとき、地

中海作戰におけるドイツの立場を極めて有利ならしめたバルカン作戰の成功が如何に重大な意義を有するかは自ら判然とするであらう。

四

バルカン作戰と並行して北阿作戰が開始されたことは、東地中海における問題の所在をハツキリと示した。バルカン作戰の最終目標はスエズを指してゐる。北阿作戰が直接にスエズを目指してゐるのに對し、バルカン作戰はスエズ攻略に必要なる戰略的準備といふことが出來るであらう。この點に關聯して、トルコに對する壓力を增大したことと、エーゲ海に進出したことの二つが注目される。

一九四〇年六月參戰以來、イタリアは東阿植民地（エリトレア、エチオピア、ソマリランド）方面よりするエヂプト作戰、リビア方面よりする東進作戰と相並び、ギリシア作戰

を行つた。右のうち第一の東阿よりする作戰は、英埃スーダンの要衝カツサラの奪取に止まり、リビアよりの東進作戰もエヂプト領シヂ・バラニの一線で喰止められ、またギリシア作戰も膠着狀態に陷つて結局華々しい戰局の展開は見られなかつたが、その戰略目標がスエズに向けられてゐたことは疑ふ餘地がない。

一九四〇年十二月、英國近東軍はエヂプト領に進入してゐたイタリア軍に對し反攻を開始し、シヂ・バラニの伊軍を追つてリビアに侵入、地中海沿岸のバルヂア、トブルク、デルナを次々に占領し、二月七日ベンガジを陷れた。これに對しドイツは積極的にイタリア援助の手を差延べ、空軍基地をシシリア島に進めるとともに、マルタ島に猛爆を加へ、その際に乘じて相當有力な機械化部隊を北阿に送り、空中輸送による兵力と相俟つて北阿遠征軍を整備、バルカン作戰と並行してロメル將軍指揮の下に猛進擊を開始し、瞬く間にリ

ビア侵入の英國軍を擊破、ベンガジ、デルナを抜きリビア、エヂプト國境を突破してエヂプト領のソルムまで進擊した。

ドイツ機械化部隊のリビア進擊は、バルカン作戰が獨伊に壓倒的に有利に進行しつゝあるのと相並び、むしろバルカン作戰以上に英國側に衝擊を與へ、スエズ危機の警報が亂打され、英近東軍當局の意見に逆つて政治的理由からギリシアに陸軍を派遣せしめたイーデン英外相の責任を問はんとする空氣すら醸成されるに至り、こゝに英國は一九四〇年のフランス屈服直後の暗黑時代に次ぎ今大戰第二の重大危機に直面することになつた。

このリビア作戰が如何に進展するかはまだハツキリ判らない。この方面における英國の主要防備線はソルム東方百五十マイルのマルサ・マトルーを中心とし、その南方シヴ・オアシスにかけて存在し、マルサ・マトルーの攻防戰がエヂプト作戰の山であらう。（一九

四〇年イタリアはソルムとマルサ・マトルーの中間のシデ・バラニまで進出したが、マルサ・マトルーに到達したといふのは誤りである）。マルサ・マトルーはアレキサンドリアと單線鐵道によつて結ばれてをり、こゝの防備線は相當の厚みを持ち、可なり堅固なものと一般に信ぜられてゐるが、一度びマルサ・マトルーが落ちたら、ナイル河口の三角洲地帶に入り、アレキサンドリア、スエズ、カイロの攻略はドイツの快速を誇る機械化部隊をもつてすれば問題ではあるまい。英國としては近東方面で集められるだけの兵力を全部集めてマルサ・マトルーを固めんとしつゝあり、これに對しロメル將軍麾下のドイツ部隊がいかに挑戰するか、正に北阿戰線の關ケ原であらう。

英國が北阿、近東、東阿全體に有してゐた兵力は大體四十萬、その一部はギリシアに派遣されてをり、マルサ・マトルーに割き得る兵力は大體二、三十萬と見られる。これに對

しドイツの北阿派遣軍は機械化師團が二、歩兵が一個師程度であつて、ドイツとしては援軍の到着を待つて充分な兵力を整備した上で一擧にスエズ進撃を行ふものと見られる。而して兵力の輸送は空中輸送だけでは不充分で、船舶によるべきことが多く、シシリア島から北阿トリポリに至る海上輸送路の確保如何が北阿戰局の動向を決する一つの重要なモメントになるであらう。

五

バルカン作戰の終了、リビア作戰の進展とともに近東の爭奪戰が愈々現實の問題として登場せんとしてゐる。ユーゴー、ギリシアの屈服後、獨伊としては一方でリビア作戰を精力的に押し進めんと努めるとともに、他方そのバルカンにおいて確立した壓倒的に優勢な地位を利用してトルコに對樞軸協力を要求するほか、エーゲ海岸に飛行基地、潛水艦基地

を進め、トルコ海岸の伊領ドデカネーゼ諸島の海、空軍基地とともに、東部地中海一帶における英艦隊並にその根據地（クレータ島、サイプラス島、ハイフア、アレキサンドリア ポートサイド等）に對する攻撃を強化し、かくてリビアのほかトルコならびにシリア（フランス委任統治領）より近東進撃を企圖するものと見られる。

而して獨伊今後の作戰の進展にとつて一番重要なのは、リビア作戰の進展振りであつて若しこれが今回のドイツ機械化部隊のペンガジよりソルムに至る電光進撃の如き調子を續けられるとすれば、對ソ關係から見て愼重に愼重を要するトルコ問題や、また英艦隊と眞正面から衝突を豫想しなければならぬシリア進撃戰には手をつける必要がないわけである。しかし實際問題としてリビア進撃戰は最大要衝マルサ・マトルーの攻略につき相當の準備を要する事實があり、ドイツとしてはバルカン作戰と並行してリビア作戰を行ひ、英

國を牽制して多大の効果を擧げたのと同じ筆法で、今度はリビア作戰と並行して對トルコ工作、シリア進擊工作を行ふものと見られ、また近東內部から英勢力を切り崩さんとする謀略工作も一層活潑となるであらう。さうして、充分に機の熟したところを見はからつて一擧に各方面からスエズ攻略、モスール進擊を企てるのではないかと推定される。

トルコをめぐる獨ソ關係は未だ各種の臆測の的であり、ソ聯が重大なる利害關係を有つてゐるダーダネルス問題につき、ドイツとの間にどの程度の諒解が成立してゐるか、これを判斷すべき材料がない。しかし大體の趨勢をいへば、バルカンにおけるドイツの覇權が確立した今日、ソ聯が從來の樞軸同伴政策を強化することはあつても弱化する理由は少いわけであつて、トルコの對樞軸協力の可能性は大ぶん增大してゐるものと見られよう。三月はじめのドイツのブルガリア進駐に對し、間接に不滿の意を表し、それに續いて一九二

五年のソ土不侵略條約を殊更に再確認し、更に獨ユ開戰の前日ユーゴーと不侵略條約を締結し、一聯の反樞軸的ゼスチュアを示したソ聯も、サロニカ陷落の翌日になるや、ドイツと新通商條約を結び、從來より遙に多い年額百萬トンの石油をドイツに供給することにし更に日ソ中立條約を結んで三國同盟に對する協力を明確にした。このソ聯の態度を通じてドイツの對土工作は漸次容易となつて行きつゝある。

シリア進擊は、東地中海の戰略的據點クレータ島とサイプラス島の占領後はじめて實現性が生れ、それまでは一寸困難ではないかと見られてゐる。しかしドイツとしては制海權を持たずしてノルウエー進擊を敢行し、大成功を收めた實例もあり、且つまた英國が東地中海情勢の緊迫化とともに、目下シリアに鬱積してゐる生活不安、政治不安を利用して一氣にシリア占領の擧に出ないとも限らず、ドイツとしては先手を打つ意味で何等かの擧に

出ないとも限らぬ。こゝの情勢の推移は注目を要する

獨伊が先般起つてイラクの反英クーデターに對しどの程度の連絡があつたかは詳らかにし得ないが、近東の内部で英國支配を脅かす如き情勢が展開しつゝあるのは著しく重大である。イラクはすつと以前から汎アラビア運動の本據で、英國の干渉を排し完全獨立を要望する聲強く、今回の歐洲戰爭勃發以來も、イラク駐屯軍を背景とする英國の壓力と、これに對する國民の反撥によつて、内閣が始終變つてゐたもので、今回のラシツド・ガイラニ將軍を中心とするイラク軍部のクーデターは決して偶然でない。いづれにしても情勢の緊迫化とともに近東方面のアラビア人の動きは漸く重大性を增して來つゝあり、これは近東に對するソ聯の重大關心とともに、特別の注意を要するに至つた。日ソ中立條約締結直後に報ぜられたソ聯、イラン間の國境緊張の報は、戰火いよ〳〵近東に迫るの感を益々深

めさせた。

近東爭奪戰が具體的に如何なる形で展開するか、我々としてはその大體の方向を示し得るのみで、現在の段階で豫言は困難である。時日は漸次これを讀者の眼前に繰展げて行くであらう。

第一部　近東、今日と昨日

一、嵐の前の近東

一

九月の末頃、最高水位に達したナイル河は、その後徐々に減水してゐたが、それでも濁つた水を滿々と湛へて靜かに流れてゐた。十月下旬の或る朝、一寸集ると喧騒なカイロ市民達も、まだ寢床から起きやらぬ時間で、河水の上を飛び交ふ水鳥の白い翼が、曉の物靜かな空氣をチョツピリ搖り動かしてゐるだけだつた。我々の乘つたブリチツシュ・オーヴアシーズ・エアウエイズ（もとのイムピリアル・エアウエイズ）の濠洲通ひの巨大な飛行艇は、エンジンの音も勇ましく、忽ちナイルの水面を離れ大空に浮んだ。さうして沙漠の上を東北へ東北へと飛ぶのだつた。

機上から見るエヂプトの沙漠は、地上で見る光景とまた何といふ好い對照であらう。カイロ附近では、何だか水を吸つた川端の砂原のやうで、老人のひからびた肌を思はせるがカイロを遠ざかるに從つて段々若返つて來る。一番綺麗だと思つたのはシナイ半島附近一帶で、恰も處女の柔肌を思はせるやうな、美しいなめらかな肌を燦々とそゝぐ熱帶の太陽に曝してゐるのであつた。飛行時間約二時間でパレスタインの北部、シリア國境のチベリウス湖に給油のため着水、ここからバグダツドまではアラビア沙漠を横斷して約六時間の行程である。

行けども行けども沙漠また沙漠も、アラビア沙漠はエジプトの沙漠に較べて何と陰慘な感じのすることであらう。色はドス黒い土色が基調であるが、所々に子供の白癬頭のやうなシミになつてゐる。さうして濃淡さま〴〵の色合を呈してゐる。勿論村一つ、人一人見

かけない。飛行艇の乘組員はライフ・ジヤケツ（救命袋）の着方をコーチする。この沙漠の眞上でライフ・ジヤケツが一體何の役に立つだらう。こんなところで不時着でもしたら一體どうなるのだらうと氣が揉める。（もつともアラビア沙漠の荒涼たる光景も、米國のソルト・レーキ附近の沙漠に比すればまだましだと思つた。これはまるで神樣が天地を作つたその日の光景を思はせるやうな、噴火口の如き襞の連續で、その陰慘さは機上から見下すものをゾツとさせた。）

飛行艇はバグダツド郊外の一湖水に着水する。乘客の顏にやれ〳〵といつた安堵の色が一齊に浮ぶ。こゝからバグダツドまでは自動車で一時間半、小石の多い沙漠の道で、バグダツド附近は道らしい道がつけてあるが、そこに着くまで一時間以上は何處を走つてもよろしいわけだ。道と名のつくものはなくとも、沙漠全體が道の役目を果してゐるので

ある。

二

一九四〇年七月に筆者がベルリンからバルカン經由でトルコに入つた時、丁度ソ聯のベッサラビア、北部ブコヴィナ侵入直後のことで、バルカン方面の空氣はかなり緊張してをり、トルコも五十萬の兵力を動員して、主としてヨーロツパ・トルコのブルガリア國境方面の防備を固め、イスタンブールの街を通つてトルコ兵が續々と第一線に行く姿がよく見られた。しかし當時新聞電報ででも傳へたとほり、イスタンブールでもアンカラでも防空演習すら一度も行はれない有樣で、戰爭切迫を豫感する現實感は缺乏してゐた。

それから著者は、シリア、パレスタインを通つて、丁度イタリアの英領ソマリ占領の直後エヂプトに入つたが、著者のエヂプト滯在中にリビア方面の戰況が少しく動き、イタリ

ア軍はエヂプト領に進入してシヂ・バラーニまで入つて來た。これに對し英國近東軍は着着と兵力を增强して反攻計畫を急ぎ、作戰に適當な冬季の迫るとともに、風雲漸く急を告げんとする形勢であつた。しかしエヂプトの首都カイロは電燈皎々、市民は平生通りの生活を續け、戰爭が直ぐそこまで來てゐるといふ現實感は深刻でなかつた。

飛行艇の上から見下すと、沙漠は何處でも飛行機の着陸に好都合に見えた。（事實、スエズ運河附近では敵の飛行機の着陸を妨げるため、沙漠の要所に土を盛り立てたり、棒を立てたり、石油の空罐を並べたりしてゐる。）一寸手を加へたら、どこでも立派な飛行場になりさうであつた。靜寂そのもののアラビア沙漠の上を飛行しながら筆者は、こゝに雲霞のやうなドイツ空軍の大部隊が翼を揃へて飛んで來る日を夢想した。しかしバグダツドの空氣は、丁度伊希開戰の直後であつたにも拘らず、戰爭なんて何處ふく風といつた調子

で、ドイツのモスール油田に對する野心など、未だ論議もされてゐない樣子であつた。近東はかうして、近づきつゝある嵐も知らぬ氣に深い靜寂の中にあるかに見えた。この靜寂は果して何時まで續くであらうか。戰爭は所詮ここまで擴がつて來るであらうか。

三

近東は一言にしていへば、沙漠とステップの國である。ナイル河流域地方、トルコのアナトリア地方、メソポタミア地方がその例外をなすのみで、近東一帶は自然的に極めて惠まれてゐない。（近東の重要產物表參照）特にアラビア半島の如きは、殆ど全部不毛の沙漠地帶である。近東の何處へ行つても、日本のやうに樹木鬱蒼たる山々は見ようにも見られない。曾てアラビア半島の眞中から生れたサラセン帝國が、西はアフリカの北岸を全部席捲して、スペイン、フランスまで入り、東は印度の國境までもその版圖を擴げたのは、今

考へて見れば、全く奇蹟のやうな感すらする。これは近代的物質文明が未だ發達しない折だつたからこそ可能であつたのであらう。

筆者は歸朝後、近東の印象記の中で、

『近東諸國を廻つて最初に得た印象は、その國民大衆の生活が如何に貧しく、文明の程度が如何に低いかといふことである。身にぼろをまとひ、天幕内に起臥しつゝ轉々沙漠に羊を追ふベドウイン族の生活はさておき、或はバグダッドの街に、或はカイロの街に寢卷やうのアラビア服をゾロリと着流して、埃の中をノロ〳〵歩き廻つてゐる人々を見る時、われ〳〵は凡そ文明國といふ觀念から離れたところにゐることを強く意識する。筆者は歸途、上海に寄り、支那の苦力を何と小ザツパリ感じたことであらう。』

と書いたのであるが、極く一部の富裕階級を除けば、住民の大部分は乞食にも似た生活を

今なほ續けてゐるのである。日本から印度洋廻りで支那、印度の諸港に寄港して近東を訪れた人ならば、さう強く感じないかも知れぬが、西ヨーロツパの富裕な生活を見て、段々と東の方へ廻つて來た筆者には、これでも人間の生活かと思はせるのであつた。

この近東が、今や世界のスクリーンの上に大きくクローズ・アツプされて來た。それは主として近東の地理的位置と、こゝの特殊な産物である石油の御陰といはねばならない。

こゝで先づ最初に斷つておくが、「近東」といふ言葉は「極東」といふ場合と同樣に、ヨーロツパを中心とした考へに基くもので、「極東」を「東亞」と改めたわが國としては、當然「西アジア」と改めなければならぬ。たゞ本書では便宜上、從來の近東といふ言葉をそのまゝ使用させて貰ふ。近東の範圍も人によつて色々と違ふやうであるが、本書では便宜上、トルコから印度に至るまでの諸國と、アラビア諸國、エヂプトまで入れることにした。

四

多くの人々が一致して指摘するとほり、今回の歐洲戰爭は現在までの情勢から判斷すれば、近東方面への波及は大體確實ではないかと見られ、また波及する日も段々近づいてゐると信ぜられてゐる。それは何故かといへば、獨伊側からすれば、この方面を制しなければ英帝國に對して最後の一擊を加へたことにならぬ。たとひドイツの英本土上陸作戰が成功しても、英國がそれでもつて手を上げずに種々噂されてゐるごとくカナダ逃避のごとき方法で抗戰を續ける場合、英國としては現在東地中海に有してゐるその制海權と、エヂプトを中心に集めてゐる約四十萬の大部隊は、將來作戰の基本として、これをそのまゝ殘すことが一般に豫想されてゐる。一方英國からいへば、ここは印度へ到る道で、まさに英帝國全體の心臟部ともいへるので、本國がたとひ無事であつても、こゝをつかれると、その

抗戰力に致命的な打撃を受け、敗北は必至となるであらうからである。現在獨伊の正面の敵はあの小ぼけな英本國ばかりでなく、多くの自治領と植民地を含む英帝國である。さうして英帝國のアキレス腱で、しかも獨伊から最も近いところにあるのはこの近東方面なのである。もつと詳しくいへば、スエズ運河とイラクのモスール油田なのである。

或る人は、ドイツは近東方面を制せずしては、負けることはないにしても、勝つことはないといつた。その意味はドイツはヨーロツパを押へて英國の干渉を許さないやうにし、その限りにおいて負けることはないが、近東を押へすしては英帝國は依然として存在を續けるであらうから、最終の勝利ではない、といふわけである。

スエズは英帝國の動脈である。平時においてさうであると同じく、戰時もまさにその通りである。こゝはアジアとヨーロツパと、アフリカの三大陸をつなぐ要衝で、英帝國の寶

庫、印度の西方外郭防衛線でもある。こゝを失ふことは連絡の中心を失ふことを意味する。英國がエヂプトを占領し、パレスタインを占領したのは實にこのスエズを護らんがためであつた。一九三六年の英埃條約においても、スエズ運河地帶の駐兵權はチヤンと殘してある。また今日スエズ運河地帶を中心に相當有力なる近東軍を集結してゐるのは周知の事實である。

モスール油出は、現在主として英近東軍と地中海艦隊の燃料を補給してゐるが、年產約六百萬トン、ドイツがこれを手に入れれば、さきにドイツの手に歸したルーマニア石油と相俟つて、ドイツの石油問題は畧々解決出來る。ドイツの平時石油所要量は大體六百萬トン、戰時はこれの二倍乃至三倍を要するとして、千二百萬トンから千八百萬トン要るわけであるが、現在のところルーマニア石油が全額で約六百萬トン、人造石油二百五十萬トン

それにソ聯からの供給と、從來のストツク、鹵獲した石油等で賄つてゐる。飛行機、潛水艦は燃料の消費量が少いので、現在の如き規模の戰爭ではドイツが石油に困るとは信ぜられてゐないが、戰爭が本格的な長期戰となつた場合の對策としては是非とも新しい石油資源を獲得する必要に迫られてゐると見られる。特に盟邦イタリアに石油資源の全然ないことを考慮すれば、その必要は一層切實になると見られる。バグダツドへの途が不可避と見られる所以である。我々はドイツがスエーデン鐵鑛の供給確保のためノルウエー進軍を敢行し、またルーマニア石油確保のためルーマニア進駐を實行したことを想起しなければならない。

五

一九四〇年十月末に始つたイタリアのギリシア作戰は、九月に始つたエヂプト作戰と呼

應して、近東方面の制覇を最終目的においたものであることは畧々明瞭である。しかし今日までのところ、イタリアは兩方の戰線において、イタリア當局の發表にあるごとく戰畧的後退を重ね、東地中海方面の形勢は必ずしも有利といへなかつた。しかし三月はじめのドイツのブルガリア進駐は、東地中海における從來の勢力バランスを樞軸側に有利にするものと一般に觀測されてゐる。

而して多くの現地消息通の見るところでは、近東方面に對する獨伊側の軍事的攻勢は

一、伊領リビア方面から陸路スエズ、アレキサンドリアを衝く方法

二、トルコを通過してシリアを經過しパレスタイン、エヂプトを衝く方法

三、ギリシアを占領し、こゝを基地として空よりシリアに侵入、シリアを軍事基地に近東一帶に進擊する方法

等のうち第一は、ドイツ機械化部隊のリビア戰線登場により一應可能となつたが、問題は海を越えて、充分な兵力を北阿へ輸送し得るか否かの一點にかゝつてゐる。第二は、トルコが依然として英國との緣を切らず、またその地形が山多く作戰に不利なのと、交通不便なことなどの諸點からして、ソ聯とドイツとの關係を一應考慮のほかにおいても、今のところ多大の困難を伴ふものと考へられる。

さうすると殘るのは第三の方法だが、この水域の制海權がアレキサンドリアを根據地とする英國海軍の手にあるのと、パレスタイン、イラク方面にも相當有力な英國の空軍、陸軍がゐる上、英國としては現在のエヂプトにゐる部隊も急派し得る體勢にある（カイロ・ハイフア間には汽車、ハイフア、ベイルート間は自動車道路あり、またカイロ、エルサレム間には一昨年歐洲戰爭勃發後この間を八時間で走る立派な自動車道路が出來てゐるので

矢張り相當な困難を伴ふものと見られる。但しドイツ軍は完全な制海權を有せずしてノルウエー進軍に成功した例もあり、海軍力が不足だからとて、空よりするシリア進軍の可能性は無視出來ないことを指摘する消息通もある。

今のところ常識的に考へられるのは以上三つの方法であるが、複雜怪奇な今回の戰爭のことゝて、どんな新しい要素が入つて來ないとも限らない。それに、近東の持つ絕對的な重要性は前述の通りであつて、守る英國側も、攻める獨伊側も、必死の努力を傾けなければならない。また現に傾けつゝあるのである。新しい要素の中には、この方面の住民の大部分を占める回敎徒の動向と、特に近年急速に國民意識に目覺めたアラビア民族の動向がその重要なる對象となる。

六

現地の多くの識者は、この回教問題とアラビア民族運動をハツキリ區別して考へてゐる。無論その重點は後者に置いてゐる。回教徒が佛教徒やキリスト教徒に比して團結力が著しく強いのは疑ひのない事實である。一生一度は信徒は誰でも行はねばならぬとされてゐる聖地メツカ順禮の風習がこの回教徒の團結力を強める力となつてゐる。しかし多くの識者の指摘するまでもなく、近年回教は民族主義の方へ席をゆづりつゝある。この點については後で述べるが、アラビア人は周知の如く、前回の大戰の時、アラビア國獨立の好餌に釣られて英國と協力、當時附近一帶を支配してゐたトルコに叛旗をひるがへしたが、大戰終了後、英國は曾ての誓約をふみにじり、シリア、レバノンをフランスの委任統治としまたパレスタイン、トランスジョルダン、メソポタミアを自國の委任統治として收め、背信的な行動をしたため、痛くアラビア人の反感を買ひ、アラビア人間に強力な反英運動を

惹起せしむるに至つた。その後英國は徐々に讓歩を續けて巧みにその鋒をさけつゝ今日に至つたのであるが、勿論こゝに甚だ火のつき易い材料が轉つてゐるわけである。

歐洲戰爭勃發以來、アラビア人は現在まで鳴りをひそめて、歐洲における形勢の推移を注視してゐる。さうして、名實ともに完全獨立の機會を虎視眈々としてねらつてゐる。昨年六月イタリア參戰後、英國はアラビア諸國の積極的な對英協力を期待した。しかし彼等は動かなかつた。英國の期待は見事に外れた。今後も英國に犬馬の勞を採るため進んで出て來るものもあるまい。萬一の場合に備へて近東防備は英本國、自治領、印度よりの部隊のみでやつて行かうとしてゐるのが英國現在の政策である。

英國の警戒しなければならぬのは、アラビア人だけではない。英國の「同盟國」エヂプトの如きも、現在の實質上の植民地狀態を脫して完全獨立達成の機會をねらつてゐる。更

に北の方からはソ聯がジッと睨んで控へてゐる。

ソ聯のイラン方面に對する野心については從來種々の風說が度々傳へられた。これは今日までのところ噂の域を出でず、現實化しないが、戰爭勃發以來ポーランド、フインランド、バルト三國、ベツサラビアと、露骨な領土的野心を見せて帝政ロシアの侵畧主義に立歸つたかのやうなソ聯であるから、最小限度の勞力で最大限度の利益を掴む機會が與へられたら、それを遠慮するやうなスターリンではないであらう。ソ聯といふ要素は極めて複雜なる影を近東方面に投じてゐるのである。

更にまた近東の問題は、同じくアジアの一角のことであつて、決して我國にとつて緣のない問題ではない。こゝにも八紘一宇の大精神によつて救はねばならぬアジア民族がゐるのである。また貿易上からいつても、この方面はわが國の非常によい華客である。それに

近東の主要產物（世界生產に對する百分比）

（英國王立國際問題研究所、情報部報告「一九三九年十一月發表「原料」による）

		トルコ	エジプト	イラク	イラン	アフガニスタン	パレスタイン	シリア	合計
棉	（一九三七—八）	〇・八	六	—	〇・四	—	—	〇・一	七・三
羊毛（一九三七）		一・七	（〇・一）※	〇・四	一・〇	〇・四	—	〇・四	四・〇
オリーヴ油（一九三八—九）		五・三	—	—	—	—	〇・九	二・〇	八・二
クローム鐵（一九三七）（クローム含有量）		一六・三	—	—	—	—	—	—	一六・三
石油（一九三八）		—	〇・一	—	—	—	—	—	〇・一
硫黃（一九三七）		—	—	—	—	—	—	—	—
小麥（一九三八—九）		二・五	〇・八	—	—	—	〇・四	三・七	七・二
大麥（一九三八—九）		五・五	〇・五	—	—	—	〇・九	七・二	一四・一
タバコ（一九三七—八）		二・六	—	—	—	—	〇・二	三・〇	五・八
胡麻（一九三七）		三・一	〇・七	—	〇・八	—	〇・五	六・三	一一・四

※輸出のみ

現在日本と獨伊をつなぐものがシベリア鐵道一本で、他に何等直接の連絡がないことを顧るとき、日本と歐洲を最短距離でつなぐ近東は、それだけでも當然現在以上の關心を要請するのである。

二、近東における獨英の地位

一

英國のパレスタイン駐在高等辨務官のオフィスはエルサレムの市街から一寸離れ、聖都全市を眼下に見下す小高い岡の上にある。これは嘗てドイツのウイルヘルム二世（現在オランダのドールンに亡命中のカイザー）が近東における離宮として建設したものとのことである。またエルサレムから死海を訪れる人は、案内人から、この道は一八九八年カイザーがトルコ訪問の途次この附近を訪ねた時、特にトルコのサルタンがカイザーのために作つたのをその後改良したのだと聞かせるであらう。（エルサレムから死海まではこの附近に特有な石の多い小高い丘を縫つて立派な自動車道路がある。所要時間は約一時間である。）さうしておしやべりが商賣の案内人は、諸君がカイザーのこの附近訪問に興味を感じ

たと觀て取つたら、更に言葉をついで、

『その當時のこと、ハイフアの一ユダヤ人がカイザーに「ユダヤ人は一體どうしたらよろしいでせう」と聞いたら、カイザーは「回教に改宗せよ、それが出來なければ、出て行つてしまへ」と答へた』

と昔話をしてきかせるであらう。

更にまた、嘗てカイザーの雄圖であつた三B政策の最後の一輪イスタンブール、バグダッド間の鐵道も、一九四〇年七月中旬無事に開通した。イスタンブールでこれに乘れば四晝夜の後にはバグダッドに着く。バグダッドからは狹軌ではあるがペルシヤ灣のバスラに連絡してゐる。地中海の寄港を中止したわが商品も、バスラで揚陸してこの鐵道で或はトルコに、或はシリア方面に、更に沙漠橫斷のトラックでエヂプトやアラビアの方面へ流れ

込んでゐるのであるが、歷史の動きを回顧すれば、感慨深いものがある。前大戰ではシリア、アラビア方面ではドイツ軍が同盟國トルコ軍を助けて作戰したのだつた。ケマル・アタチュルクもこの方面の戰鬪に參加してゐた。今度はドイツ軍が近東にその元氣な姿を現すのは果して何時であらうか？

二

現在トルコの態度が不卽不離で容易に動きさうにないのと、東部地中海の制海權を英國海軍が持つてゐること、リビア方面からのイタリア軍の進擊が思はしくないこと、スエズを英國に押へられてゐるためエチオピア方面への物資補給が困難であることなどで、英國側は近東方面でホッと一安心の形であると傳へられる。樞軸側はこれに對し如何なる手が打てるか、また現に打ちつゝあるかを述べて見やう。

大戰勃發以來、ドイツの近東方面における活動の根據地は――外ならぬイランである。イランの首都テヘランを訪れた人々は、街で多數のドイツ人に出會ふのに一驚する。現在技師その他の名目でイランに入り込んでゐるドイツ人は、一旅行者の談話によると、數千人に上るのではないかといふことだ。エヂプトをはじめ英佛の勢力範圍から開戰とともに一齊に追ひ出されたドイツ人にとつては、イランが最も都合のよい、而も唯一の活動根據地だつたのである。

フランスが屈服してから、ドイツの活動の出來るところが一つ殖えた。それはシリアである。ダマスカス、ベイルート、アレツポ等のシリアの都市が今やドイツの活動の根據地となつてゐる。シリア特にダマスカスは、イラクのバグダツドと共にアラビア民族運動の歷史的な根據地である。シリアが獨伊側の手に入つたことは、それだけでも英國にとつて

大きな痛手である。シリア高等辨務官ビユーオー氏が辭職して、その後任に任命された例のフランス右翼の大立物、シヤツペ氏が十一月末エール・フランスの飛行機で急ぎ赴任の途中、地中海上で「戰鬪區域に入つた」ため擊墜され、遂に死亡した事件は、或はドイツ側の觀測の如く、英國側諜報機關の仕業かも知れない。何故ならば同氏の聲望と親獨的傾向は、英國側にとつて極めて好ましくないからである。

それからもう一つ、それはアラビア半島の南端にあるエーメンで、この國はズツと前からイタリアと特殊な友好關係にある。但し現在イタリアがこゝを盛に利用してゐるとのニユースはまだないやうだ。前大戰の時はドイツはこゝを基地としてタンガニーカの獨領東アフリカ植民地と本國との連絡を圖らんとしたことがある。序手だがこの國は俗說に癩病が多いと傳へられ、それに邊鄙なので確か日本人はまだ一人も入國したものがない筈で

ある。

三

獨伊側が現在近東で有効に使用してゐる武器は宣傳と煽動であらう。右に擧げた基地からは獨伊側の密使が各方面に派遣されて、現在の英國支配に對し叛旗をひるがへすやう說得するのに努めてゐる。また反英宣傳のパンフレツトも持ち込んでゐる。さうしてそれと平行してベルリンと南イタリアのバリの放送局が毎日數回づつアラビア語で放送して、英國が如何に各地で敗け續けてゐるか、また英國と手を切るのが如何にアラビア人の爲になるかを反復して、近東の大衆に呼びかけてゐる。

これらの獨伊側の工作が現實にどの程度の效果を收めてゐるかは測定に困難である。例へば筆者の滯在したエヂプトの例を取つて見ても、こゝでは外國の放送を聞くことは日本

と違つて至極自由で、何の制限もなく、開戰當初はドイツからのアラビア語放送の時間などラジオ屋の前に人だかりがしてゐたさうであるが、筆者が滯在してゐた頃では。一應民衆が厭きたのか、そんな光景は見られなかつた。これらは最初は豫期の效果を收めたものの、その後英國側躍起の逆宣傳に押されてゐる形である。

結局現地で見てゐると、近東の民衆は生活程度も極めて低く、野蠻人に少し毛の生えたやうなものが多いが、それでも從來帝國主義諸國の手によつて揉まれ拔いたのであるから現實の力の前には屈服するが、單なる宣傳、煽動では容易に動かないだらうといふのが普通だ。また當時イタリア側の放送中には『イタリア空軍のアレキサンドリア爆撃の結果、同市に數千人の死者が出て、その葬儀に大變だ』とか『カイロ市街で白兵戰が行はれた、英國の軍隊に反感を有する市民が軍隊と衝突したためである。』とかの放送もあつたが、誇張

した報道は現地では直ぐ判るので、他のニュースの正確さにも疑ひをもたせる結果になつて、餘り有効でないことを見せつけられたのだつた。

日本の新聞では一時アラビアの王者、サウデイ・アラビア國王、イブン・サウドが英國に對して叛旗を翻す手筈になつた旨を報じてゐたが、成程イブン・サウドが紅海の北端にあるアカバ港やペルシヤ灣沿岸の領土等の歸屬權につき從來英國と爭つて來たのは事實であるが、大戰勃發以來は不即不離の嚴正中立で、現實に獨伊の力がその國境まで押し寄せて來た場合はともかく、單なる宣傳、煽動では容易に動かないだらうといふのが現地の消息通の一致した觀測であつた。

一九四〇年八月のイタリアの英領ソマリランド占領の結果、紅海（サウデ・アラビアの東南海岸線をなしてゐる）がイタリアの勢力範圍下にあるごとく考へるのはなほ尚早のやうである。英國側では、イタリアの參戰當時、そこにゐたイタリアの潛水艦八隻中、大半は擊沈したと豪語し、紅海は事實上航海に安全だと稱してゐたが、この豪語の當否は兎も角として、事實英國の多數のコンヴオイ（護送船團）は或は本國から南阿廻り、或は濠洲から印度寄りで、此の紅海を通過してスエズに軍隊、軍需品等を運んでゐたものである。

一體にイブン・サウドに限らず近東の有力者達は息を凝らして歐洲戰局、特にドーヴア海峽と東地中海の戰局の推移を凝視してゐるのが現狀である。百の宣傳よりも一の事實の方が彼等を動かすことが大きいであらう。

四

ドイツが近東諸國で相當大きな期待をもつて見られてゐるのは事實である。長い間近東諸國を搾取し、嫌はれ者であつた英國とフランスを叩いてくれるのは近東諸國民にとつて

痛快なことに違ひないからである。それにもう一つ、それはドイツがまだ一度も回教徒なり、アラビア民族なりを直接の支配下においたことがなく、その限りにおいてドイツはフレツシュマンだからである。ドイツが近東から英佛勢力を追拂つてくれたら、經濟的な支配は兎も角として、政治的には近東諸國の獨立を認めてくれるであらうといふのが彼等のドイツに掛けた希望のやうである。それから更にもう一つ。それはドイツのユダヤ人對策である。パレスタインで散々ユダヤ人と揉み合つたアラビア人が、ユダヤ人彈壓の本家、ドイツに嘱望するのは當然の話である。前に述べたカイザーのユダヤ人に對していつた言葉を思ひ出すが、ドイツはアラビア人の嘱望に答へて、イタリアと共に從來大にパレスタイン問題でアラビア人を支持してゐたのである。パレスタイン問題にドイツが如何に興味をもつてゐたかは、ドイツ政府機關D・N・B通信がエルサレムに二名の特派員をわざ〳〵

そのために置いてゐた事實からでも推測出來るであらう。

一方イタリアは、英佛の反對を敢然と押切つて、エチオピア占領に成功したため、近東諸國におけるその威望は一時大いに上つた。彼等は何はともあれ、今まで強いと信じてゐた英國が見事に打負かされたので痛快で仕樣がなかつたのである。しかしその後イタリアのアルバニア占領の結果、近東諸國のイタリアに對し抱いてゐた情熱が可なり薄らぐに至つた。アルバニアは歐洲大陸における唯一の回教國として、近東諸國がそれまで非常な好感を抱いてゐた國だからである。このアルバニア占領はイタリアのリビア征服と相並んで英國に好個の反伊宣傳の材料を提供する結果となつた。即ち英國側では、前回の大戰後グラチアーニ・リビア總督（現在のリビア方面軍司令官）の行つたリビア鎭壓當時の話を持出し、イタリアが如何にリビアの回教徒をひどく痛めつけたかを宣傳して、イタリアの支配

下に立つたら同樣の目に會ふぞと逆宣傳にこれ努めてゐるわけである。（英國側の推測ではリビアの人口はグラチアーニ將軍の鎭壓の結果、百三十萬から八十萬に減じたと）

五

獨伊側の攻勢に對し、英國側は如何にしてこれを防がんとしてゐるだらうか。最も大きな要素は英國がエヂプト、パレスタイン、イラク一帶にかけて集結した陸軍、空軍と、東地中海（基地はアレキサンドリア）紅海（基地はアデン）方面に集めてゐる海軍である。

一九四〇年六月、フランスの屈服の結果、近東方面においてはシリアと紅海の佛領ソマリランド（ジブチ）に大きな防備上の穴が開いた、その上英本國はドイツの上陸作戰におびえダンケルクから着のみ着のまゝで逃げ歸つた軍隊だけで、本國の防備すらどうなるか判らぬ有樣、近東方面への增援など思ひも及ばぬ有樣であつた。もし當時にイタリアが一瀉

千里に行動を起したら、近東の情勢は既に一變してゐたであらうとは多くの人々の見るところである。

イタリアが何故その當時に行動を起さなかつたのか、その理由は審かにし得ないが、英國はその後徐々に氣力を回復し、本國の防備と並行して着々近東方面へも軍隊の增援を行つた。筆者がエヂプトに滯在してゐた頃までに近東軍はかうして可なり充實して來たのである。

現在近東軍の實力はどの位のものか、イタリア側の數字では、兵力約四十萬、飛行機一千臺程度となつてゐるが、この數字の當否は別として、相當に强化されて來てゐるのは事實である。この外、筆者の滯在當時既にアレキサンドリアには主力艦三隻、航空母艦二隻を含む東地中海艦隊がゐた。これは現在もつと强化されてゐる模樣である。

この軍隊の存在が軍事的目的以外に、近東各國の動向を牽制することに大きな働きをしてゐることは率直に認めなければならない。勿論アラビア人の間に反英的空氣が相當に存在してゐることは疑ふ餘地がない。イラクの如きはエヂプトよりももつと反英的空氣が強いのは現地では周知の事實であるが、しかしそれかといつて、トルコを除いた外の近東諸國が軍隊らしい軍隊をもつた國が果してどこにあるか。エヂプトでもイラクでも精々二三萬の軍隊しかもたない。飛行機は精々四五百臺であらうか。こんな有樣で反英運動を起しても、それは目的を達しないまへに無慈悲に鎭壓されてしまふであらう。反英分子が獨伊から實力的な援助を受け得るやうにならねば、現在の反英熱に點火し得ないであらうといふのは結局このためである。

三、近東の再登場

一

近東の地はアジアとヨーロツパを繋ぐ陸の橋として昔から重要な地位を占めてゐた。即ち大昔の東洋と西洋の間の交通路は

一、南部線

セイロンをアジア側の終點とし、これより海路アデンに至り、アデンより二路に別れ、一路はアラビア半島の西岸を傳ひキヤラバンでシリアに出るもの、第二はアデンより紅海を通つてスエズ地峽に出で、そこから陸路アレキサンドリアに達してヨーロツパと連絡するもの

二、中部線

セイロンからペルシヤ灣に出で、メソポタミアに達し、そこから陸路中部、北部シリアまたはアナトリアに通ずるもの

三、北部線

陸路支那よりキヤラバンで中央アジアを經てイランの北部に出で、そこから或は黑海に出で、或は南下してメソポタミア、シリア線に合して地中海岸に出るもの

の三つが算へられた。右のうち最も重要で、且つ最も知られてゐるのは第三のルートであるが、これらの何れを取る場合も、近東は東洋、西洋の連絡地點として甚だ重要な位置を占め、當時の列强爭奪の中心となつた。そして東洋を代表するペルシヤ、モンゴール勢力と西洋を代表するギリシヤ、ローマ勢力、後ではビザンチン勢力との間に近東の支配權を

めぐつて長い間衝突の繰返されたことは古代史の示すとほりである。その後行はれた例の十字軍の如きも、決して純宗教的な性質のものでなく、寧ろ近東を押へて東洋への通路を確保せんとする經濟的利益から出發した試みであつた。

オスマン・トルコがこの地を占領して以來、近東はヨーロツパ諸國と東洋との連絡を斷ち切る障壁となつた。近東を經すして東洋に達せんとする歐洲諸國の努力は一四九八年の希望峰迂回の印度洋航路の發見となつて酬ひられた。かくて近東は陸橋たる重要性を喪失して、その存在を忘れられるに至つた。この時以來近東はオスマン・トルコの腕の中で長い〳〵眠りに入つた。そして近東に以前の重要性を與へて、その眠りから覺したのはスエズ運河の開鑿であつた。

二

近世において、歐洲人の眼を、それまで數百年間忘れられてゐた近東へ向けしめたのは實にナポレオンであつた。彼のエヂプト遠征は印度を抑へ英國の息の根を止めるための第一段階で、海軍力の不足から遂に失敗したが、これを契機として歐洲の視聽は一齊に近東方面へ向けられるに至つた。ナポレオンの遠征によつてこの方面の重要性に目覺めた英國は、一八三九年アデンを占領、一八五七年ペリム島を占領した。更に一八六九年のスエズ運河開鑿は、近東を何人の眼にも明かなやうに舞臺の表面に押し出した。この運河の支配權を得るため、英國は一八八二年エヂプトを占領、更にその南のスーダンも、これがエヂプト支配を確保のため、且つまた當時計畫されたケープ＝カイロ・ルート確保のため必要であるといふ戰略的根據により一八九六―九八年、キツチナー將軍によつて占領され、かうして近東支配の基礎を築き上げて行つた。

一方スエズ運河開鑿によつて海路東洋への最短通路が開けると共に、陸路でも主としてドイツ系資本の活動により、バルカンからトルコ、メソポタミアを經てペルシヤ灣に出よとする計畫が進捗して行つた。バルカンよりイスタンブールまでの鐵道、卽ち中歐と近東を繋ぐ鐵道の第一段階は一八八八年完成、これは更にアナトリアに延び、一方バグダツドからもこれと連絡すべき鐵道工事が開始され最初の雄大なる計畫が將に實現されんとする時、第一次世界大戰が勃發した。（イスタンブール、バグダツド間の鐵道はトルコと英國との對立からその連絡が久しく行惱みになつてゐたが、英土接近後工事進捗し、一九四〇年七月開通）

かうして再び世界の舞臺の上に再登場した近東は、本國と東洋植民地を結ぶ要衝としてこれの支配權を要求せんとする英國、印度への道を見出さんとするドイツ、ペルシヤ灣へ

の南下を希望するロシア、シリア地方に傳統的な野心をもつフランス等、歐洲帝國主義諸國の激烈なる爭覇戰上に置かれるに至つた。特に十九世紀の末期から今世紀のはじめにかけてペルシヤ、メソポタミア方面で新動力の王者、石油が發見されるに及び、競爭は一層激烈となつて行つた。

三

更に第一次大戰後、高速度運輸機關として航空機が登場したことは近東の重要性、而してこれを支配せんとする列國の慾求を益々强めるに至つた。蓋し近東は東洋、西洋間のみならず、アフリカを含めた三大陸をつなぐ要衝だからである。既に一九二九年英國のイムピリアル・エアウエイズは近東經由ロンドン、印度間の定期航空を開始、一九三五年更に濠洲まで延長した。フランスのエール・フランス會社はシリア經由マルセイユ、ハノイ間

の航空路を持ち、更にオランダのK・L・M會社もアレキサンドリア、バグダッド經由、ヘーグよりバタヴィアまでの航空路をもつに至つた。またイタリアのアラ・リットリア會社もエヂプト經由、本國と東アフリカ植民地間に定期サービスを持ち、更にドイツのルフトハンザ會社もハイファ、バグダッド、テヘラン、カブール經由、本國と支那を結ぶ大航空路開設を準備中であつた。（註　現在アリテイッシュ・オーヴアシーで、エアウエイズは起點をロンドンからアフリカのダーバンに移し引續き一週二回、濠洲航路を運轉してゐる。またオランダのK・L・Mも起點をヘーグからバレスタインのリッダに移し依然としてバタヴィア航路を運轉中である。」

この航空路の發達は前記の石油の發見と共に近東の意義を倍加するもので、近東は列强の鋭い注視を浴びつゝ第二次大戰を迎へたのである。

四、第一次大戰後の近東

一

スエズ運河の開鑿(一八六九年)と石油の發見によつて一躍世界に再登場した近東は、第一次大戰勃發當時はオスマン・トルコ(現在のトルコのほか名目上アラビア半島全部領有)イラン、アフガニスタンの三獨立國とエヂプト(大戰勃發と共に英國の保護領となる)が存在してゐた。

しかし「歐洲の病人」トルコは各方面でその無力と腐敗振りを暴露し、益々重體になつて行きつゝあつた。イランはロシアと英國の勢力範圍に分割され、何時兩國に分割されるか判らぬといふ不安に絶えず襲はれてゐた。アフガニスタンも殆ど同樣の狀態にあつた。エ

ヂプトは英國の完全な植民地であつた。卽ち嚴密な意味で、近東は自己その主人公でなかつた

第一次大戰が勃發するや、トルコは獨墺側に立つて參戰した。アラビア半島では獨土聯合軍と英國軍並にメッカ大主フツセイン(英國と結んでトルコに叛旗を飜す)の率ゐるアラビア軍との間に戰爭が行はれた。エヂプトにおいてもサルタンの宣布したジハツト(聖戰)に應じて立つたサイド・アーメツドの率ゐるセヌシ族と英軍の間にリビア國境附近で衝突が行はれた。ペルシヤは北部は露軍、南部は英軍によつて占領された。かくて近東の殆ど全部が硝煙に包まれた。而してその硝煙の蔭には十九世紀の後半以來漸次強まりつゝあつた民族意識がすさまじい勢ひでその成長を續けつゝあつた。

大戰終了後、トルコの退却によつて近東の地圖は塗り變へられた。近東におけるトルコ

領は

一、英國とメツカの大主フツセインの間の密約

二、英佛間のサイクス・ピコー協定

三、英國とユダヤ人間の協定

以上の三つの相矛盾する英國側の言質の結果、英佛間の利害調節、英國、アラビア間の意見一致を見るまでに幾多の難關に逢着したが、結局においてアラビアを獨立せしめ、シリア（當時はアラビア半島の地中海岸全部を含む、而して現在アラビア國民主義者のいふ「シリア獨立」とはこの當時のシリアを指すものである。）を四分し、（現在の）シリア、レバノン、パレスタイン、トランスジョルダンの四區分のうち、前二者はフランスの委任統治に落ち、後二つは英國の委任統治に移され、更にイラク（メソポタミア）も英國の委任

統治となつた。

二

大戰後近東の各國をとらへたものは激烈なる獨立への希求であつた。先づオスマン・トルコの廢墟の中からケマル・アタテュルクの新興トルコが誕生した。エヂプトはサード・ザグルールの指導下に反英運動が急速に進展し、英國の保護の廢止（一九二二年）となつてエヂプトは名目上獨立國となり、その後一歩を進めて英埃同盟（一九三六年）の締結とともに完全獨立の道を驀進して行つた。イランではソ聯の援助によつて英國の勢力は一掃された。そしてリザ・カーン・パーラヴイの有能なる指導の下に、トルコ同樣に進歩的な近代國家建設が着々進められて行つた。アフガニスタンでも同樣にソ聯の援助で英國勢力の浸透に終止符が打たれた。歐洲帝國主義諸國の羈絆を脫し完全獨立へのマーチはこゝでもは

じまつた。

更にアラビアではメツカの大主フツセインはヘジヤス王國を樹てゝ獨立したが、これはやがてその隣りのネシドのイブン・サウドによつて併合され、イブン・サウドの優れたる指導の下にアラビアは着々統一の實を擧げるに至つた。イラクは英國の委任統治を離れ一九三〇年以來獨立國となつた。エーメンも獨立した。あとに殘るシリア、パレスタイン、トランスジョルダンの三委任統治國も獨立への努力は英佛帝國主義の壓迫にも拘らず絶えず執拗に續けられて來た。

第一次大戰勃發の一九一四年と第二次大戰勃發の一九三九年とを比較して見るとき、全世界の中で最も著しい變化を示してゐるものの一つは實にこの近東である。この二十五年間に近東の大部分はその國民運動を結實させた。中には結實を今後に俟つものもあるが、

民族國家建設と帝國主義搾取反對の聲に一貫してゐるので、その目的が達成するまでは彼等は執拗な努力を止めないであらう。

三

この國民意識の發展と表裏して、近東諸國がその共通の宗教と、共通の文化と、それから共通の運命から、相互の理解を深め、お互ひに接近せんと努力してゐることも、前回の大戰以來の最も著しい現象であつて、一九三七年のトルコ、イラン、アフガニスタン、イラクのサーダバツド條約はその最も輝しい成果といはねばならぬ。

大戰後の近東回教國間の最初の接近はソ聯を仲介して成立したトルコ、アフガニスタン兩國間の友好條約（一九二一年三月一日調印）である。この友好條約はその後二回更新され一九二八年以來永久的なものとなり、兩國は歐洲帝國主義の攻撃を受けた場合相互に支援

することを申し合せた。同年ソヴェート、イラン條約の調印とともに、同様ソ聯の仲介によつてトルコ、イラン友好條約が成立し、更に一九三〇年イラン、アフガニスタン兩國も結ばれ、爾來近東北部諸國は極めて密接なる友好關係を持續して來た。そしてイラン、アフガニスタン兩國の國内建設に對しトルコは物質的、精神的に凡ゆる援助を惜しまなかつた。

一九三二年以來トルコ、イラク兩國間にも同様の條約締結が企圖されたが、これは

一、ユーフラテスとチグリスの合流點シヤト・エル・アラブの歸屬をめぐるイラン、イラク兩國の紛爭が未解決であつたこと

二、當時イラクは二年まへ既に獨立してゐたものの、イラクで勢力を占める英國が近東北部諸國グループのソ聯との密接なる關係からイラクがこれに接近するのを妨げたこと

のために急速に運ばなかつた。しかして一九三七年になると

一、その前年政權を握つたイラク内閣が反英政策を取りトルコへの接近を圖つたこと

二、一方英國はイタリアのエチオピア征服と、それに伴ふ地中海における英伊關係緊張の結果、英國自身トルコとの接近を圖る必要が生れたので、イラクの對土接近を妨げる必要がなくなつたこと

この二つの理由により、イラクの對土接近は急速なる勢ひで行はれた。同年六月懸案のシヤト・エル・アラブ歸屬問題もトルコの仲介によつて解決、その結果一九三七年七月九日テヘランの近郊、サーダバツド城においてトルコ、イラン、イラク、アフガニスタン四國の條約が成立した。

この條約により右四國は、現存國境の不可侵、國際問題に對する緊密なる協力を約し、

更に侵略行爲と侵略國に對する援助を否認した。同時に締約各國間の關係を攪亂することを目的とする組織に對しては各國ともその活動を禁することを申合せ、卽ちソ聯の近東に對する共産主義宣傳を封じた。期限五年で滿期とともに更に五年更新し得ることになつてゐる。

四

一方サウヂ・アラビアとその隣國イラク、トランスジョルダンの間には大戰後長い間紛爭が絶えなかつた。蓋しイラク國王ファイザル、トランスジョルダン大主アブヅラはサウヂ・アラビアのイブン・サウドに亡されたヘジヤス國王フツセインの子息だからである。大戰直後の英國外交は「ディヴアイド・アンド・ルール」(分割して統治する)の原則に從つてこれらの對立を緩和するどころが逆に深める政策を採つて來たのであるが、三十年代に

入るや、その政策を變更し、アラビアを統一、これを利用して他國のアラビア支配割込を防がんとする作戰から、これら諸國の接近に乘出した。この結果一九三六年先づサウヂ・アラビアとイラクの兩國が舊怨を水に流して接近、一年後にはイラクとエーメンとの接近が實現、こゝにアラビア・ブロックの結成が完成、これは更にイラクを通じて近東北部諸國のブロックと連繫した。而して英國はイラクを通じてこれら兩陣營の連絡緊密化を圖つた。

かうして後に殘るのは被委任統治國を除いてはエヂプトだけとなつたが、一九三六年英埃條約締結直後、エヂプトはサウヂ・アラビアとの接近と相並んでトルコに對しても接近を圖り、一九三七年土埃友好條約が成立した。なほこの直後トルコはエヂプトに使節團を派遣し友好條約を一步進めて軍事同盟締結を策したが、當時近代エヂプト軍はやつとこれ

から整備に取掛らうといふ時で、結局物にならなかつた。

かくて近東諸國の接近は歐洲帝國主義に對抗する回教諸國の共同戰線確立の立場からと

これと逆に帝國主義諸國間の競爭との、二つの要因から推進されてゐることを知るであらう。

一

五、列強の對回教政策

一

第一次大戰後近東地方では被壓迫民族の解放を呼號するソ聯、國民運動のまへに一歩々々退却を餘儀なくされる英佛、「イスラムの保護者」として新に登場したイタリア、これら諸國の激烈な角逐の下におかれた。

ソ聯は前大戰後、獨立への熱意に燃えた回教世界に對し、全く新しい態度を以て臨んだ最初の歐洲大國であつた。ボルシエヴイキ政權確立直後の一九一七年十一月二十四日、ソヴエート政府は「勤勞回教徒一に對してマニフエストを發し、全回教徒に對し帝國主義諸國の掠奪者どもと鬪爭すべきことを呼びかけた。さうして同時に、帝政ロシアにコンスタン

チノープルを與ふべき旨の聯合國秘密協定、ベルシヤを英露兩國の勢力範圍に分割した一九〇七年の英露協定、トルコ分割の秘密協定等を破棄すべく宣言した。これらがトルコ、ベルシヤ等において「回教國の大憲章（マグナカルタ）」として大歡迎を受けたことは當然である。

續いて一九一八年一月、「回教徒中央委員會」がモスコーに設置された。そしてこの招待により同年十二月回教徒會議が開かれた。これは回教世界の中にソ聯の宣傳組織を植ゑつけるためのものであつた。而して宣傳時代に引續き、實際活動に移り、一九二〇年秋ソ聯政府は「東洋諸國民國際會議」をバクーに開催、全回教國に二千五百の招待狀が發せられ、一千八百名以上の出席を見た。英國はボルシエヴイキ東洋政策の危險性を認め、近東、中東、印度の代表者がバクー會議に出席せんとするのを阻止せんとした。印度では代表者が逮捕され、ベルシヤ代表の乘込んでゐた汽船はベルシヤ灣で英空軍の爆撃を受けた。

このバクー會議でソ聯の東洋政策の弱點が初めて明らかにされた。出席者は二派に分れた。一つは回教國における國民革命の完成をもつて社會主義革命の一段階とする共産主義派、もう一つは革命自身が目的であつて社會主義革命からは出來るだけ遠ざかり、ソ聯の援助は國民革命の完成に當つて帝國主義諸國との闘爭に利用せんとする一派であつた。前者の主張は敗れた。後者が勝を占めた。蓋しこれらの回教國の全部が、極めて保守的なる宗教を信奉してゐる上、何れも後れたる農業國で、社會主義革命の物質的基礎が未だ成熟してゐなかつたのである。回教諸國がソ聯に求めたものは國民革命完成に必要なソ聯の武器と武力援助と、それから外交的支援であつた。さうしてソ聯はこれを喜んで與へた。

ソ聯の實力援助は先づアフガニスタンに向けられた。ソ聯より資金と武器の供給を受けたアフガニスタンは、一九一九年、印度とアフガニスタンの國境で英國兵と衝突、英軍を

擊破した。その結果英國は八月四日、ラワルピンディ講和條約を締結、これ實に回教國における英國の大戰後最初の外交的退却であつた。この條約は一九二一年十一月のカブール條約によつて擴張され、アフガニスタンは英國の支配を離れて完全な獨立を確保した。ソ聯とアフガニスタン間には同年二月條約が成立、これにより兩國は締約國の利害に相反するごとき協定は如何なる第三國とも結ばぬことを約した。またソ聯はアフガニスタンに年額百萬金ルーブルの財政的援助(以前は英國が與へてゐたもの)を與へ、同國におけるソ聯勢力は英國退却の後を受けて著しく強くなつた。但しアフガニスタンに社會革命を起さうといふソ聯の計畫は失敗した。國民の反抗が強くてどうもならなかつたのである。首都カブールは共産主義宣傳の基地になつたが、アフガン人に對しては利目なく、專ら國境を起えて印度に呼びかける結果となつた。

二

アフガニスタンより更に重要なのはイラン(ペルシヤ)であつた。蓋しソ聯はイランをもつて近東回教國の中心と見做してゐた上、同國が一方でソ聯、他方で印度、メソポタミアの英國の勢力範圍と境を接してゐるが故である。ソ聯は最初赤軍の助力によつてペルシヤのボルシエヴイキ化を圖らんとした。しかし北部ペルシヤにボルシエヴイキ化を試みんとするや、ペルシヤ人の抵抗が強くなり、結局これを斷念、その後は專ら外交的、精神的、經濟的方法によつてペルシヤを援助し英國に當らせた。一九二一年二月、ソ聯、ペルシヤ間の條約が成立した。これによつてソ聯は一九〇七年のペルシヤ分割に關する英露條約を破棄したのをはじめペルシヤに對する凡ゆるソ聯の特權を放棄した。またソ聯は緊急の場合ペルシヤに武力援助を與へることになつた。たゞアフガニスタン、トルコの場合と同樣

ベルシヤの社會主義化は成功せず、共産主義はこゝでも「國家の敵」として嚴重に取締られてゐる。（トルコとソ聯の關係は「トルコ」の項參照）

ソ聯はその後、アラビア人、ユダヤ人抗爭の地、パレスタインに勢力擴張を圖り、そこに「パレスタイン共産黨」を組織した。この中にはアラビア人部とユダヤ人部があり、アラビア人部は民族解放、ユダヤ人は社會解放の相異つたスローガンで活躍したが、勢力微弱但し黨員中には相當の有力者がある。フランスの人民戰線内閣當時、シリアにも共産黨が組織され、このパレスタイン共産黨の所屬となつた。長い間英國はこの共産黨の活動に何等の干渉を加へなかつたが、一九三七年になつて、その危險性を認識しフランスと協力して取締に乘出した。

現在までのところ、ソ聯の目的、卽ち民族革命を社會主義革命と結合せんとする試みは

いづれの回教國においても成功を收めてゐない。蓋し回教諸國のモデルとするところは先進資本主義國であつて、資本主義國に追付かうとするのが彼等の現在の目標なのである。その上、ソ聯にとつて都合の惡いのは、回教と共産主義の關係である。ソ聯は共産主義をもつて「回教の原始的形態」であるとし宣傳にこれ努めたが、ソ聯國内の回教徒（約二千萬を算す）に對する彈壓のニュースは、いつとはなしに國外に漏れて回教諸國をしてソ聯の宣傳に深い疑惑の念を持たせる結果となつた。特にサウヂ・アラビアにおけるソ聯代表ナシール・チユルヤコロフをはじめソ聯が各地で行はんとした無神論の宣傳は著しく回教徒の感情を害した。

三

しかしソ聯の回教國における活動の結果、歐洲諸國の對回教國政策は著しい變化を受け

すには濟まなかつた。ソ聯が煽つた回教國の國民革命熱と、それの完成に對するソ聯の實力援助とは、歐洲諸國の從來の對回教國政策を根本から搖るに充分であつた。その最もよい例が近東北部回教諸國における英國の場合である。卽ちこれら回教諸國においては、英國の政策は國民運動に押され勝ちとなり、自國の勢力維持は各方面で困難を感ずるに至つた。

ソ聯の回教國に對する思想的指導と物質的援助が如何に威力あるかを英國は先づアフガニスタンにおいて認識した。またトルコにおいても英國はケマルの率ゆるトルコ國民運動の實力に直面し一番先きにトルコ侵入軍を引上げざるを得なかつた。

イラン(ペルシヤ)においても英國は、ソ聯のバックによる強い抵抗に遭遇しなければならなかつた。ソ聯のプロレタリア革命後、英國は北ペルシヤまで侵入した。一九一九年英

軍はテヘランを占領、英、ペルシヤ協定を押つけてペルシヤを事實上の保護國化せんとした。この協定に對しペルシヤ議會はソ聯の支援によつて承認を拒否した。一方國民革命軍は漸次力を整備し、二年後リザ・カーンの指導の下にテヘランを奪回、英國は北ペルシヤから撤兵を餘儀なくされた。撤兵は同國に對する英國の支配を根こそぎにした。これ以來ペルシヤにおける英國の地位は著しく弱くなつた。更に經濟的分野においても、新興イランは一九三二年アングロ・イラニアン石油會社のコンセッション契約改正に際して、英國を向ふに廻して首尾よく自國の主張を貫徹し得た。

かうしてこれらの近東北部諸國に對しては、國民運動の力が強くて、國民運動と英國自身の帝國主義的目的の妥協は一應失敗に終り、英國は一步一步退却を餘儀なくされた。

一方アラビアでは國民運動は他の回教國の何れにも劣らず盛であつたが、こゝは前記の

アフガニスタン、イラン、トルコと遠ひ、ソ聯と直接國境を接せず、ソ聯よりの支援がそれほど効果的であり得ないのと、一方英國が陸路パレスタインとペルシヤ灣をつなぎ、印度への通路を確保することをもつて英帝國戰略上最も重要なりとしてこれに固執してゐるため、國民運動と英帝國の利害の妥協が或程度まで實現した。その好例がイラク（メソポタミア）であつて、國民運動を滿足せしむるため英國はイラクに一九三〇年以來獨立を許し、その反面英帝國の利益を確保するため空軍根據地、航空路設置、外交政策に對する或程度の支配權を收めた。またエヂプトにおいては執拗なる國民運動にも拘らず、英國は久しく讓歩しなかつたが、エチオピア戰爭を契機とするイタリアの勢力增大に直面して、國民運動と妥協を策し、遂に一九三六年の英埃條約となつた。かうして國民運動のまへに讓歩すると見せかけながら最小抵抗線に沿つて出來る限り英帝國主義の利益を擁護せんとするのが近東外交の基本動向である。

四

イタリアは前回の大戰前既にリビア、エリトレア、ソマリランド等を領有してゐたし、また大戰直後も聯合國の一員としてトルコ干涉に參加したが、本格的に回教國世界に歐洲强國として登場したのはファシスト政權樹立後である。さうしてイタリアは、回教徒間に不必要なる抵抗を惹起することなしに自國の政治的、文化的發展を圖らんとしたが、これが如何に困難であるかはキレナイカ、リビア鎭定工作で初めて明らかになつた。キレナイカ、リビアは一九一一―一二年の伊土戰爭の結果伊領となつたものであるが、前大戰後まではイタリアの領有は都市に限られ、奥地では殆ど名目に過ぎず、例のセヌシ族がこゝに頑張つてゐた。グラチアーニ將軍の率ゐる伊軍に對し、彼等は勇敢に抵抗し、イタリアは

散々手を燒いた。グラチアーニ將軍はその「キレナイカ征服記」の中で次のやうな事例を擧げてゐる。卽ちこの時、最後まで伊軍に抵抗したセヌシ族の首領オマール・エル・ムクタールは遂に捕虜となつてグラチアーニ將軍の前に引出された。以下は將軍とムクタールの間の問答――。

問『何故お前はこんなに頑强に伊軍に對して抵抗したのか?』

答『信仰のため。』

問『人數も軍需品もあんなに少くて、伊軍をキレナイカから追出し得るとの希望を持つてゐたのか?』

答『否。』

問『では一體何を求めてゐたのか?』

答『何物も求めず。我はわが信仰のため戰つた。それで充分である。他はアラーの手中にある。』

グラチアーニ將軍はセヌシ族の頑强なる抵抗に直面し、過激なる手段に訴へざるを得なかつた。彼は「白い惡魔」と呼ばれて恐れられた。このイタリアのキレナイカ征服に對し、全回教國は一齊にセヌシ族に同情を示し、イタリアを攻擊した。而してこの工作によつて惹起された回教國の敵意を緩和するには長い間の努力が必要であつた。

このキレナイカ征服と同時に、イタリアはアラビア半島の南端エーメンに工作を開始した。エーメンは伊領エリトレアの對岸で、イタリアはこゝに勢力を扶植して紅海の入口を扼しようとした。當時エーメンはその北のサウヂ・アラビアの勢力伸張に脅威を感じてゐたので、兩國の接近は順調に進み、兩國間には一九二六年友好通商條約が成立し、イタリ

アは一應こゝに基地設定することに成功した。しかしサウデ・アラビア國王、イブン・サウドは非回教國がアラビア半島に勢力を扶植するのを好まず、イタリアの進出に脅威を感じた英國の支持のもとに、イタリア、エーメン關係の切崩しを圖り、エーメンと接近した。その後エーメンは英國傘下のイラク、サウジ・アラビア協定に參加（一九三七年）、アラビア・ブロツクを結成した。これでイタリアのアラビア半島進出は行惱みとなつた。

次に起つたのはエチオピア征服である。エチオピアの北部は全部回教徒であるため、回教徒はヤレナイカ工作の時と同樣に一齊にイタリアを攻擊した。彼等の間ではイタリアの膨脹政策を恐れる氣持が一般に著しく强くなつた。しかしその反面イタリアが英佛の經濟制裁を蹴つてエチオピア戰爭に勝利を得たことは、回教國に對するイタリアの威信を著しく高めた。

ムツソリーニ首相は、これよりずつとまへ、一九二八年頃からイタリアが回教の友であると宣言し、回教徒の人心收攬につとめてゐたがエチオピア征服と同時にエチオピア國內の回教徒に對し寬容政策を採るとともに、高まつたイタリアの威信を利用して盛に各國の回教徒に呼びかけた。その頂點をなすものが一九三七年三月のムツソリーニ首相のリビア旅行で、この時トリポリで「イスラムの劍」の授與式があり、リビア總督バルボ將軍はム首相を「イスラムの保護者」と宣言した。これらの宣傳が果してどの程度の成功を收めてゐるかは判定困難であるが、右の「イスラムの劍」授與式後、回教の大本山、カイロのアズハル大學總長、マーラギが『イスラムは非回教徒の保護者など必要としない』旨を公にしたことは注目される。

その後アルバニア進駐（一九三九年）は同國が回教國であるため回教諸國の對伊感情を惡

化せしめたが、回教徒の當面の問題は英國の支配を脫して完全獨立を圖ることであり、英國牽制に有利と見れば伊勢力の利用を惜まない。たゞ彼等の間には英國といはずイタリアといはず、歐洲諸國の帝國主義的野心に對しては深い猜疑心がひそんでをり、これをイタリアが除去するにはなほ多大の努力が必要である。

六、汎イズラミズムか、汎アラビズムか

一

近東方面は回教徒の居住範圍、いはゆる「回教圈」の中心をなしてゐる。而してこの方面が大部分植民地、半植民地の狀態にあるため、回教の研究は政治的な立場から早くより帝國主義諸國によつて採り上げられ、現在各國とも研究を進めてゐる。しかしさきにも言及した通り、近來の傾向は、宗教の民衆に對する影響力が衰へはじめ、その代りに民族的自覺の方が次第に强められて來てゐることは、現地の專門家の一致して指摘するところであつて、宗教政策一本建では既に行詰りを感じ、民族政策との二本建ての對策が要求されるに至つてゐる。卽ち近東の場合、汎イズラミズムと汎アラビズムの二つである。

回教徒は近東よりアフリカ北岸一帶のほか、支那の奥地、蘭印、印度にもそれ〴〵數千萬居住してをり、回教徒對策はわが國も現在以上の熱意をもつて考究しなければならぬ問題であると信ずる。汎イズラミズムは前世紀の七十年代、アフガニスタン人ジヤマルデインによつて唱道され始めたもので、近東方面における英露その他の帝國主義諸國の露骨な侵略政策に對する抗議の意味をもち、全回教徒の團結を要望するものであつた。而してこれは當時のトルコのサルタン、アブヅル・ハミツドに政治的に利用され、十九世紀の末葉全回教世界を搖り動かしたのであつた。卽ちアブヅル・ハミツドはこれによつて近東、北阿の當時彼の版圖内にあつた回教徒に對する支配の强化と、彼の版圖外、卽ち印度やロシアの回教徒にも働きかけて、漸く落日の色濃き彼の帝國の補强工作を試みたのであつたが當時トルコは衰へたりと雖も全回教徒の中心地として可なりの傳統的影響力を保有してゐ

たため、彼の呼びかけは相當の反響を呼ぶに充分であつた。前回の大戰當時、トルコは聯合國に對して回教の「ジハツト」（聖戰）を宣言し、全回教徒が一致して聯合國に當るべきことを命令した。この「ジハツト」は當時のメツカの大主、フツセインが英國側と同盟してゐたため、必要なる裏書きが得られず事實上不發に終つたものの、それでもリビア方面のセヌシ族をはじめ一部ではこの「ジハツト」に應じて實際に英國に挑戰したものもあり、また印度の回教徒間にても相當の反響を見出し英國の行動を牽制するに役立つたのであつた。

回教は本來團結力が强いので知られてゐる。それは宗教と政治が極めて密接に結合されてゐること、メツカを全回教徒の中心とし、一生一度のメツカ巡禮は勿論のこと毎日五度の禮拜、金曜日（回教の日曜）の一週一度のモスクにおける禮拜、さては埋葬に至るまで、全部メツカの方向へ向つて行はれ、凡ての日常生活が直接メツカと密接に結びついてゐる

ことなどによるものと見られる。しかしバグダッド、ダマスカス等のカリフ時代を過ぎてトルコが全回教徒に號令するやうになつてから、宗教の衰微が著しく、回教の誇る團結力もそれとともに段々失はれて行つた。マホメットの宗教的情熱はその子孫達の代になつてサラセン帝國の樹立によつて全盛期を現出したが、帝國の衰微とともにその原動力になつてゐた宗教そのものも衰微せざるを得なくなつた。ジヤマルデインの叫びは本質的にはこの宗教復興の意味をもつものであつた。

二

サルタン、アブヅル・ハミツドの汎イズラミック運動は一應回教徒の心を捉へた。しかしそれは長くは續かなかつた。宗教よりもつと切實なものが當時徐々に諸國の胎内で動き始めつゝあつたからである。それは何か、外ならぬ民族運動である。これはトルコでは青

年トルコ黨の運動、エヂプトでは青年エヂプト黨の運動、更にペルシヤでは青年ペルシヤ黨の形を採つてその後發展して行つたが、アラビアの胎内で起つたものが汎アラビア運動であつた。

汎アラビア運動の歴史は他の場所で詳細に述べるであらうが、これは民族的な自覺によつて、起つたもので、當時の虐げられた植民地の狀態からアラビア民族を救ひ出さうといふ、宗教でなくて民族的感情を基調とする運動である。日本人が佛教徒であるまへに先づ日本人であると感ずるのと同様に、アラビア人も回教徒であるまへにアラビア人であることを感じはじめたのである。そしてこれは汎イズラミズムが段々とその影響力を弱めるのと正反對に、徐々に力を強めて今日に至つてゐる。

前大戰の結果、オツトマン・トルコは亡んだ。さうしてケマル・アタチユルクのトルコ

は宗教を政治から分離して「回教諸國における最初のプロテスタント國」として更生の第一歩を踏み出した。以前のやうに宗教即國家、宗教即政治ではなくなつた。宗教は或は日本のやうに或は歐米諸國のやうに、個人の私事になつた。カリフは廢止された。

エヂプトその他の回教國でも、宗教の演ずる役割は甚しく限られるやうになつた。現在の全回教國の中で宗教即國家、國家即宗教の回教の原理をそのまゝ實行してゐる國はイブン・サウドのサウヂ・アラビアと、その隣りのエーメン國の二つ位であらう。

現在汎イズラム運動は、キリスト教青年會の組織に倣つた回教青年會を諸所の中心地に建立し、各種の會合を催したりしてゐるが、それが最初に目指してゐた回教國の政治的な結合は各國の利害關係が錯雜してゐて著しく實現困難である。トルコが一九二四年カリフを廢止してからヘジヤス國王フツセインがカリフの稱號を用ひた。尤もこれは他の回教國

からは是認されなかつたし、當のフツセインも間もなくイブン・サウドに亡された。その後一九二六年カイロで開かれたカリフ會議及び同年メツカで開かれた全回教會議でもカリフの復興問題が討議されたが、實際的な決定には到達せずして今日に至つてゐる。

たゞ注目すべきは、最近この汎イズラミズムは回教諸國の國民的自由要求の闘爭において、精神的な武器として使用され始めたことで、既にいくつかの共同宣言の中に現はれてゐる。一九三八年シリア、エヂプトで開かれた回教會議は、パレスタイン問題に影響を與へて、その解決をアラビア人側に有利ならしめたし、また一九三七年のサーダバツド條約は『汎イズラミツク・ブロツクの中核』と宣言されたし、更にサウヂ・アラビア、エヂプト條約、サウジ・アラビア、イラク條約も「回教的信實」といふ言葉を使つてゐるのである。

三

一方汎アラビア主義は、シリアを根據地としてその後各方面に擴つて行つた。大戰後パレスタインにおけるアラビア人、ユダヤ人間の抗爭、シリアにおけるフランス支配に對する抗爭等により一層強くなつた。これに同情を寄せてゐるものはアラビア語を話す各國に散つてゐる。汎アラビア主義の最初に目指すところは、アラビア半島、イラク、シリア、パレスタイン、トランスジョルダン等即ちアジア的アラビア人の間の單一アラビア國またはアラビア聯邦の樹立である。エヂプトはアラビア人ではないがアラビア語を話す國民として相當の運動より離れてゐたが、最近はアラビア人でないといふ理由で、最初はこの運絡を保つてゐる。汎アラビア主義者の最終の夢は、モロツコからペルシヤ灣まで連る單一アラビア國、或はアラビア聯邦の組織である。

現在の汎イズラミズムと汎アラビズムの評價は、これに對する英國の態度の中に最もよく反映してゐる。汎イズラム運動に對しては英國側は從來比較的に穩健な態度を取つてゐるやうである。卽ち英國としてはこの運動が實を結ぶやうなことがあつても、それは近東方面の現狀維持に役に立てるまでで、これが直ちに近東における英國の地位を動搖させるものでないことを信じてゐるやうである。現地の消息通は英國がこの運動を利用してエヂプトをしてカリフを宣言させ、このカリフを通じて近東支配を强化する手に出る可能性のあることを指摘してゐる。事實、公平に見て、若しカリフが復興されるとすれば、その候補者はサウデ・アラビアのイブン・サウドとともにエヂプトが最も適當でないかとは多くの人の指摘するところである。何をいつてもエヂプトはこの附近の國々の間では一番進んだ有力な國といはねばならぬからである。またイタリア側もエヂプトを占領してエヂプト

國王にカリフを宣言させ近東の回教をして英國に叛旗をひるがへさせようと企てる手をもつてゐる。英國がエヂプトの確保に躍起になつてゐるのは、こんな點にも關聯があると見られる。

これに反し汎アラビア運動に對しては、英國側はそのダイナミツクな力を恐れて、極力警戒を怠らない。近東における英國の地位を內部から切崩すのはこのアラビア運動が最大の、さうして恐らく唯一の力であらうからである。從つて獨伊側の着眼は當然こゝに集らざるを得ない。この運動こそは將來の近東の動向を決定するものとして最も大きな關心を呼んでゐるのである。

第二部　トルコ、エヂプト

一、古きものと新しきもの

一

スイスからイスタンブールまで走つてゐるシンプロン・オリエント・エツキスプレスに夕方ソフイアで乘込むと、その翌朝イスタンブールに着く。航空機の發達したヨーロツパではあるが、大戰勃發後トルコ政府は『飛行場修理のため』外國機の乘入れを禁止してしまつた。ソフイアからイスタンブールに行くには否應なしに、このシンプロン・エツキスプレスの御厄介にならねばならない。

嘗て神聖東ローマ帝國の首都であり、オツトマン帝國の首都であつた輝かしい歷史をもつイスタンブールは、街中いたるところ千年の歷史を物語る遺跡が一杯で、遊子の心を嚴しい現實から引離して、大昔の彼方へと誘つて行く。ボズフオラス海峽はこゝでは關門海

峽よりもつと狭い。渡舟で五分間位である。聖ソフイア寺院をはじめエキゾチツクな回教のドームが全市到るところに立つてゐる。

停車場から昔ながらのデコボコの石の道を上りつめると、住宅地帯のベラで、その中心がタキシムである。わが大使館のイスタンブール事務所は海峽を一目で見下すベラの高臺にある。直ぐ下に聖ソフイア寺院が見える。海上には大小色々な船が動いてゐる。向側、即ちアジア・トルコ側では、バグダツド鐵道の起點ハイデルパシヤ驛のガツチリした建物も見える。街の背後に迫つてゐる岡は日本のやうに木が多くないのが物淋しい氣を起させる。西洋と東洋の交合點、イスタンブールは確かにこの附近でのユニークな街である。

共和國になつてからイスタンブールはその活力の大部分をアンカラに奪はれて、その昔に比してさびれてゐる。第一次大戰の時百十二萬あつた人口も今では七十數萬しかない。

筆者の滯在してゐた頃には、丁度ソ聯のベツサラビア侵入直後のことで、ルーマニアから追はれた英系石油會社の役人や避難したユダヤ人などでホテルといふホテルは滿員の狀態であつたが、イスタンブールの底を流れる空氣には如何にも過去の思ひ出に生きる老人のやうな物淋しい氣持があつた。

新興トルコの本當の息吹きに觸れようと思へば、アンカラに行かねばならない。夕方イスタンブールで汽車に乘ると、その翌朝アンカラに着く。約十四、五時間の行程である。東海道線のやうに海岸の直ぐ傍を走るところもあれば、日本の田舍の畑の眞中を走つてゐるやうなところもある。アンカラに近づくと邊りは一帶に赤肌のステツプである。ステツプといふと何だか詩的な響きをもつが現實は何のことはない、一種の沙漠なのである。

イスタンブールがトルコの過去を代表するとすれば、アンカラはトルコの現在と、それ

から恐らく將來を代表するであらう。ケマル・アタチュルクの革命は、トルコを回教的、東洋的、中世紀的、封建的な狀態から救ひ出して、西洋流の文明國の域にまで高めようといふのを指導原則としてゐた。彼の革命の目標は、一言にしていへば『トルコの西歐化』とでも評してよからう。さうしてこの彼の意圖を最も忠實に表現してゐるがこのアンカラの建設であると見てよからう。

アンカラが新興トルコの首都に宣言されたのはトルコ獨立戰爭の終了後一九二三年の十月であつた。獨立戰爭の時にはアンカラ（當時アンゴラと呼ばれてゐた）は國民運動の總本部としての役を果した。當時は人口七萬五千の一地方都市で、水の欠乏になやみ、マラリアが一杯蔓延してゐた。この荒野の眞中に新しい都市を築くことは絶大の努力を必要とする難事であつた。しかし不屈の努力は自然を征服した。沼澤地は排水され、マラリアの

媒介者たる蚊は一掃された。水は郊外に立派な貯水池を作つて、そこから全市に供給することに成功した。巨大な額に上る勞力と資金の力で、沙漠が一變され人の住めるやうになつた。ドイツ人技師を招いて都市計畫を行ひ、立派な官廳街、住宅街、公園、遊園地、並木通りを持つ西洋風の新興都市が出來上つた。アンカラを訪れる人は、街の人に貯水池を作るのが如何に困難であつたか（水源が少いので外人技師がどうしても駄目だと逃げたのをトルコ人の手で設計完成した）、また一本の街路樹を育てるのに毎日々々如何に長い間水をやらねばならなかつたかを話して聞かせるのである。

然らばトルコは現在まで果してどの程度までイスタンブール的なものを揚棄してアンガラ的なものを建設したであらうか。トルコ革命成立以來十八年間で今日たどりついた業績を、革命前の狀態と比較して調べて見よう。

二

近代トルコは周知の如く前回の大戰後ケマル・アタチユルクの手によつて建設されたものであるが、その背景を理解するには、それより少しく前にさかのぼらなければならない。一八七六年サルタン、アブヅル・ハミツドは國内に鬱積した改革の要求に押されて憲法を制定公布した。これが近代トルコ史の起點をなしてゐる。翌年この憲法は停止されたが、自由主義的思想は強い底流として殘つてゐた。特に青年トルコ黨は「統一、進歩委員會」を作つて、陸軍將校間をはじめ各方面で活潑な運動を行ひ、この思想を擴げて行つた。一九〇八―九年の革命によつて青年トルコ黨はアブヅル・ハミツドを轉覆し、憲法を制定し、政府を樹立した。

幾多の點でこの青年トルコ黨の革命はケマルのトルコの前驅者であつた。重要なる改革

が行はれ、トルコの國民的感情が强化された。しかし當時オツトマン帝國は歐洲、アラビア、アフリカの各地方に分れ、民族も利害も種々雜多で容易に統一國家は作り得なかつた。しかし十九世紀においてバルカン諸國がオツトマン帝國から分離したこと、一九一一―一二年の伊土戰爭、更に一九一二―一三年のバルカン戰爭などによつてトルコがその最後のアフリカ植民地リビアと殘存歐洲領の大部分を奪はれたことは、この國粹主義的思想を益々强化した。

そこに世界大戰が起つた。トルコは獨墺側に立つて參戰した。ガリポリにおける奮戰にも拘らず戰況は全體的にトルコに非であつた。英軍はパレスタイン、メソポタミアを占領一九一八年には英佛伊聯合軍はコンスタンチノープルを占領した。一九一九年五月にはギリシヤ軍はスミルナを占領した。一九二〇年八月のセーヴル講和條約はオツトマン帝國を

寸斷した。卽ちこれによれば、アラビア植民地や東トラキアは勿論のこと、トルコの中心であるアナトリア地方から分割され、トルコは歐洲諸國の植民地に墮するほかはないやうに見えた。

この時救國の英雄として現はれたのがケマルで、英佛の屈押しでスミルナより更に奥地に進擊したギリシヤ軍を叩き伏せ、赫々たる勝利をもつて獨立戰爭一九一九—一九二二を終り、一九二三年のローザンヌ講和會議に臨んだ。而してこの講和會議でトルコは(一)アナトリアに對するトルコの主權確認、(二)不平等條約の廢棄、(三)オツトマン帝國の諸外國に對する負債の輕減等を獲得した。但し、重要なダーダネルス海峽問題については完全なる主權を承認されるに至らず、この點についてトルコが目的に達するにはこれから十三年後の一九三六年のモントルー會議まで待たなければならなかつた。(ダーダネルス海峽

問題については別の場所で詳しく述べる。)

このローザンヌ條約によつて、外に對して一應新興トルコの地位を確立したケマルは、素晴らしい精力をもつて、最も困難な國家再建事業を推し進めて行つた。嘗て青年トルコ黨によつて行はれた地均し工作は、この場合大いに役に立つたが、長年の戰爭によつて疲弊困憊してゐた國民を鞭ちつゝ廢墟の上に新しい國を築き上げて行かうといふケマルの努力が並大抵でなかつたのは容易に想像される。

三

ケマル・アタチユルクの行つた改革の中で最も重要なものは、宗教を政治から分離したことである。オツトマン・トルコは一種の神權國家であつて、そのサルタンは同時にカリフであり、政治上の支配權と宗教上の支配權とを兼ねてもつてゐた。政治と宗教は奇妙に

緊密に融合してゐた。たとへば現在でも宗教と政治とが分離してゐないエヂプトその他の回教國に見られるごとく、宗教はその儘政治の中に融け込んで、政治の一部を行つてゐた。その一例が教育であり裁判であり、また財産の管理である。卽ち教育は回教の寺院であるモスクで行はれ、人事の裁判は國教の僧侶の手で行ひ、信徒の管理にはワクフと稱する一省がちやんと政府の中に存在してゐる。これらはトルコでは何れも廢止された。

元來回教はコーランのほか、ハヂイス（マホメットの言行を綴つたもの）と先例集といふものがあつて、これに從つて政治と宗教を行ふのが原則になつてゐる。サラセン帝國の盛期、回教國が各地に擴つて行つた時代には、これらに自由な解釋を與へて、化石化を防ぎ得たのであるが、その後回教國が衰へるとともに解釋も段々彈力性を失つて行つた。オツトマン帝國時代には、かうして回教は進歩に對するブレーキの役目しか果さないやうになつてしまつた。新興國を建設せんとするケマルがこれを廢したのは當然であつた。ケマルと逆の行き方をしてゐるのがイブン・サウドのサウヂ・アラビアで、此處に行はれてゐるワハビ運動は、原始回教に歸れとて、コーラン、ハヂイス、先例集等を文字通りそのまま實行しようと努めてゐるものである。

尤もサルタン、アブヅル・ハミツドが嘗て試みたやうに、回教國の宗教的側面を强調しカリフとしてその版圖內外の回教徒の忠誠を强め、これを政治的に利用するといふ利益がないではなかつたが、アタチユルクは斷乎として宗教を政治から分離してしまつた。蓋し大戰の結果、その植民地の全部を喪失し、回教を政治的に利用しようとしても、事實上不可能に立至つてゐた事情にあつた上、進歩の障碍として從來余り多くの弊害があつたがためであらう。アタチユルクの政策はトルコ人のみのトルコの建設で、このためギリシヤを

はじめバルカン諸國よりトルコ系住民を歸國せしめ、逆にトルコにある外國系住民をその本國に送り歸するいふ根本的な對策を立てて着々實行してゐるやうな有樣で、トルコとしては他民族を統制するために宗教を利用する必要は全くなくなり、必要なのはトルコの民族的一致團結の基礎になるナショナリズムなのであつた。

宗教を政治から分離したといつても、このことはトルコ國民の九十八パーセントまでが回教徒であるといふ事實を變へるものではない。この意味でトルコは回教國ではないが但し回教徒國ではある。アタチュルクは回教を天上からひきずり降してその統御の出來る範圍に置いた。宗教は國家の絶對的な主人公でなくなつた。これ以來トルコ國民は宗教を丁度われ〳〵と同樣に個人の私事として營みつゝそれに鞠ひされることなしに民族國家の建設に邁進してゐる。

四

アタチュルクの改革が現實に如何なる實を結んでゐるか、その最も著しい一例としてトルコにおける女性の地位を擧げることが出來やう。オツトマン帝國時代のトルコ女性は男性の愛玩物以外何等の意義ももたない哀れな存在であつた。上流社會の女性は結婚したが最後、殆ど全く外出することなく深窓に閉ぢ籠つてゐた。（現在でもエヂプトなどでは結婚して數年間一度も外出したことがないといふ女性を筆者は知つてゐる。）稀に外出する時はヴェールで顏を包み、夫以外の男性から顏を見られることを防いだ。美姬千人を擁したサルタンのハーレムは例外とするも、金持は四人まで女房をもつことが許されてゐた。何の權利も有たない彼女たちは、極めて容易に離婚されるのだつた。

それが今日ではどうか。アンカラでもイスタンブールでもトルコの女性達は極めて活潑

に大股で歩いてゐる。そして男性と同じやうに仕事をしてゐる。地方議會の議員は勿論、國會議員にもなれる。現に一九三九年の選擧では議員總數約四百人のうち二十人までは女で占められてゐた。同一勞働に對する同一賃銀の鐵則が確立され男性と同じ賃銀が貰へる。學校は男女共學である。嘗て男性のみに許されてゐた離婚の權利すら認められてゐる。今や彼女達は法律的にも社會的にも經濟的にも、また政治的にも、各部門に亘つて完全に男性と同權を享受してゐる。

もう一つ新興トルコの明るい業績を紹介しよう。それは傳染病撲滅の運動である。オツトマン帝國時代、公共衞生などにつき國家が何等の注意を拂はなかつたのは不思議でないとして、國内には溜り水や濕地が多くてマラリアが物すごい勢で蔓つてゐた。事實このマラリアがトルコの人口增加の最大の敵であつた。共和國になつてから政府は早速このマラ

リア退治に乘り出し、今日までに著しい成績をあげてゐる。例へば首都アンカラの如きは昔はマラリアの巢窟であつたが、今日では全く安全である。マラリアがトルコ全國から完全に驅逐される日も遠くはないであらう。トラコーマに對しても同樣な精力的な鬪爭が行はれ、今日では既にこのために失明する事例はなくなつてゐる。

回教國家の古い衣をかなぐり捨てた新興トルコは、このほかにも國民生活の全分野に亘つて思ひ切つた改革を行つてゐる。例へば法律にしても、少しづつでは面倒くさいと、一九二六年に民法はスイス、商法の一部と刑法はイタリア、殘りはドイツから、こつそりそのまゝ借用したごとき徹底したやり方である。また國字も一九二八年從來のアラビア文字を捨てゝラテン文字を採用した。文盲の數はこれ以來ぐん〳〵減りつゝある。（といつても文盲の率はまだ非常に高い。）

五

しかし最も大きな問題は、共和制になつてから十八年でトルコの國内建設が實際的にどこまで進んで行つたかである、トルコは本質的に農業國で、國民の最大多數は農民であるが、政府の手により眞劍に各般の農村改良が行はれてゐるに拘らず、農民の生活が依然として極めて貧乏であることは注目しなければならない。それから近代國家として必要な工業は、その建設にやつと着手したばかりであることを併せて注目しなければならない。ここではその重要性に鑑み、トルコにおける工業建設の狀態を一瞥して見よう。蓋し工業化によつてのみトルコは眞の獨立を獲得することが出來るからである。

オツトマン帝國時代、トルコの工業が殆ど見るべきもののなかつたことは改めていふまでもない。工業化の基礎條件はローザンヌにおける不平等條約の撤廢。特に一九二九年、

名實とも關稅自主權獲得によつて、先進諸國の安價な商品の洪水を防遏してからである。共和國政府は當然のことながらその重要政綱の一としてトルコの工業化を擧げた。そしてその成立の一九二三年から約十年間は主として個人企業の保護を目指し、一九二六年五月「工業奬勵法」を制定し、個人企業に對する特權賦與、課稅免除等の諸方法によつてその發展を助成した。その目的は自國で生産可能の商品を自給することによつて貿易を改善することにあり、この結果右法律の適用を受ける企業數は一九二三年の三四二から一九三二年には一、四七三に增加した。このうち四十五パーセントは農業、家畜業、漁業、狩獵等の原始産業で、二十三パーセントは纖維工業であつた。右の法律の適用を受ける工場の從業員は一九三四年末で六萬九千人（うち女一萬六千人）、その所要原料の八十三パーセントは國內生産で賄つてゐたことは注目すべきである。

一九三三年、當時の經濟恐慌の影響もあつて、政府は工業の發展に對し國家の干渉を強化することになり、五ヶ年計畫を樹立、翌一九三四年から實施した。この五ヶ年計畫は一方で自給自足を更に徹底させると共に、基礎工業の確立を圖り、國防の強化を目指すものであつた。而して右計畫によれば

一、纖維工業の擴充（綿、麻、羊毛、人絹）

二、紙製造工業の樹立

三、採鑛業の樹立（鐵、コークス、銅、硫黄）

四、陶器製造業の樹立（ガラス及び堘類、陶器）

五、化學工業樹立（硫酸、鹽化物、苛性ソーダ、過燐酸）

を目的とするもので、經費四千四百萬トルコポンド、うち一千六百萬トルコポンドはソ聯

よりのクレヂツトによるものであつた。

右五ヶ年計畫は一九三八年大體において完成した。最も著しい進歩を遂げたのは纖維工業の部門であつて、紡錘數は一九三二年の九四、〇〇〇から一九三七年には二三二、〇〇〇へ、機織數は一、二〇〇から四、六八〇を增加、六つの官立工場（うち四つはドイツ製機械使用）の勞働者は約一萬、これらの諸工場でトルコの綿糸、綿布消費量の約四分の三を供給し得ることになつた。更に紙も大部分の國民消費を自給出來るやうになり、また採鑛業、陶器製造業、化學工業の諸分野においても著しい成績を擧げた。なほ特に注目すべきは、長年の懸案の鐵工業樹立に第一歩を踏み出したことで、熔鑛爐はアンカラ西北方の黒海岸エレグリ市附近のカラブクに設けることに決定した。而して鐵工業確立に要する資金は最初はドイツのクルツプが出す筈であつたが、結局ロンドンのブラツサート會社の割

込みが成功し、同商會が資金二千七百萬トルコポンドで年額二十萬トンの鐵を生産する工場を建設することになつた。（一九三六年十二月）

この五ケ年計畫の結果、綿布、ガラス、羊毛等の輸入は著しく減少したが、反對に鋼鐵機械類、交通機械等は著しく增加するに至つた。

この第一次五ケ年計畫の好成績によつて引續き第二次五ケ年計畫が一九三八年九月に採用された。これは鑛業の發展を中心とするもので、これに伴つて全國電化を目指す發電所の建設、鐵工業の建設を主眼とし、その他の分野においてはトルコ產原料によつて生產し得る商品の製造を一層促進することになつた。なほ東南部イラク寄り國境の石油の試掘繼續もこの計畫の重要な一項をなしてゐる。この第二次五ケ年計畫に要する經費は八千萬トルコポンドで、その大部分は英國のクレヂットによるはずである。この第二次五ケ年計畫

は目下進行中である。

かうして共和國政府從來の工業政策は正しい方向に進んでゐるが、トルコがアウタルキーを達成するにはなほ前途遼遠といふほかはない。トルコの目下欲しいのは國內建設に必要なる平和である。國內建設、これがまだ依然としてトルコの關心の第一である。今戰爭に捲き込まれて共和制の下で折角ここまで築いて來た成果を無駄にするやうなことは到底忍び得ないところであらう。

二、トルコをめぐる列強

一

新興トルコの首都アンカラの一角、各國の大公使館區域の眞中に、四隣を壓するやうな堂々たる鐵筋コンクリートの建物がある。ドイツ大使館である。街の人達は「あの中には タンクの十臺も置いてあるのではないか」と怪しむほどである。これはトルコ共和國の前途が未だ海のものとも山のものともつかず、列強が依然としてその大公使館をイスタンブールに留めて、情勢觀望の態に出てゐた頃、ドイツが他國に率先して建てたもので、現在の主人公、フオン・パーペン大使は、こゝを根じろに八面六臂の活動を續けてゐる。イタリア、フランスの大使館も立派である。英國のは大分落ちる。英土接近が歷史の淺いことを

反映してゐるかのやうだ。今の主人公は例のヒユトゲツセン大使である。日本大使館は小ぢんまりしたしもたや風、一寸他國と比べものにならない貧弱なものである。丁度日本のトルコに對する關心の程度を反映してゐるかのやうだ。

現在、世界の腕つきの外交記者に、何處に行つて見たいかと聞けば、その多くはトルコを擧げるであらう。アンカラはベルリン、ロンドン、ニューヨーク、モスコーに劣らず興味があるからである。それはトルコが獨ソ伊英各國の勢力の交合點で、トルコの向背如何が歐洲戰爭今後の發展に最も大きな役割を果すからである。

今回の戰爭に對するトルコの態度は、一九三九年十月の英佛土三國協定で決定され、これによりトルコは樞軸勢力の近東波及を防止する一大ダムの如き役割を果しつゝある。フランスの屈服が英佛に對するトルコの信賴を一時動搖せしめたことは明らかである。蓋し

トルコにおけるフランス語の普及狀態を見てもその一端がうかがはれる如く、從來フランスの文化政策が如何に深くこの方面に根を下してゐたかは、むしろ我々の想像以上である からである。若しフランス屈服の惹起した心理的打撃の影響が強い間に英本土上陸作戰、或は地中海作戰が急速に行はれたら、トルコの態度は變更し得たであらう。しかし事實はこの通り運ばなかつた。黑海の向岸のルーマニアまで完全にドイツ勢力下に立つに至つても、或はブルガリアがドイツ軍に占領されても、トルコの態度は依然として親英、反獨伊である。トルコは最後まで英國を支持して共に倒れるつもりなのか？

二

現在のトルコ外交の背景を理解するために、先づ共和國成立以來今日までのトルコと列強との關係を振返つて見よう。

ソ聯

新興トルコ成立の當初からトルコの最良の友だつたのはソ聯である。卽ち革命ロシアと新興トルコは、トルコがその國內に侵入したギリシヤ軍に對して奮戰中の一九二一年三月十六日モスコーで調印された協定を基礎として握手した。この際、ソ聯の友好的態度により北方國境に後顧の憂ひのなくなつたことが、アタチュルクの獨立戰爭勝利の最大の原因であつた。元々帝政ロシアが黑海の出口であるダーダネルス海峽とコンスタンチノープルに對し領土的野心を抱いてゐたことは公然の祕密で、このロシアの野心が前回の大戰においてトルコを驅つて獨墺側に參戰せしめた最大の原因であつた。しかし革命ロシアは從來の野心を放棄して、右の協定により列強に先んじて新興トルコに好意的中立を約束したのである。當時トルコは國の內外に敵を控へ、惡戰苦鬪の最中であつたため、ソ聯がトルコ

に對して示した友情はトルコ國民に忘るべからざる深い感銘を與へた。このモスコー協定によつて礎石を置かれたソ土友好關係は、その後兩國政治家の個人的接觸、訪問の交換、經濟、工業、スポーツ、その他使節の派遣、兩國の通商關係の强化、兩國新聞の好意的報道等により一路親善の度を增して行つた。特に一九三二年のトルコ首相（現大統領）イスメット・イノーニューを團長とするトルコ親善使節團のモスコー訪問、これの答禮として翌年行はれたソ聯國防人民委員ウオロシーロフ將軍のアンカラ訪問は劃期的な成功であつた。

ソ土兩國の緊密なる關係は種々の協定の成立によつて强化された。その中で最も重要なものはモスール油田問題に關する交渉が英土間に行はれてゐた際、一九二五年十二月十七日パリで調印されたソ土友好中立協定で、これによつて締約國の一國は相手國に對して向

けられた如何なる攻撃、提携、同盟その他あらゆる非友好的行動に參加しないことを約した。このパリ協定は一九三五年に至り更に十年延長されて今日に至つてゐる。

しかし兩國間の緊密なる國交關係にも拘らず、兩國は互に相手國の內政には干涉しないことを確約、共產主義はトルコ共和國建國以來トルコの公敵ナンバー・ワンとしてこれを宣傳するものは嚴罰に處されてゐる。この反面トルコは汎ツラン主義、卽ちソ聯領內に居住してゐる多數のトルコ族をトルコに糾合しようとする運動を斷念してゐる。蓋しトルコ內における共產主義の宣傳がトルコに對して痛いのと同樣に、否それ以上にソ聯領內のトルコ族に對する呼びかけはソ聯として迷惑だからである。特にソ聯內居住のトルコ族は殆ど全部回教徒で、ソ聯の民族政策、宗教政策上最も困難なる問題を提供してゐるのであるソ土親善關係はかうして傳統的親善關係を維持しながら、今回の戰爭勃發を迎へた。

ドイツ

前回の大戰でドイツ側に立つて慘敗を喫したトルコとして、大戰直後ドイツに對する感じが著しく惡かつたのは當然である。しかしトルコが國家再建の難事業に着手した時、トルコの求める援助は英佛からは來なかつた。彼等はすつと後に至るまで新興トルコに對する懷疑と不信を捨てなかつたのである。この際英佛から海外の販路を失はれ、自國の商品市場を發見せんと努力してゐたドイツは、トルコの有望性に着眼して援助に乘出した。ドイツの物資、ドイツの技術、ドイツの文化が新興トルコの建設に貢獻した功績は實に大きい。例へば第二次大戰勃發前までトルコの輸出入の略々半分はドイツが占めてゐた。これを反映して外交的にも一九二四年の獨土友好條約を皮切りに極めて緊密であつたが、一九三三年のナチス政權の成立以來、特にドイツのバルカン工作が積極化するに及んで緊密な

る經濟的關係にも拘らず、トルコは政治的にはドイツに對して警戒の度を強めるに至つた

イタリア

一九一一―一二年の伊土戰爭の結果、アフリカのリビアのほかドデカネーゼ群島をその手に收めたイタリアは、小亞細亞、特に西部アナトリア地方に對する領土的野心を隱さなかつた。これは伊參戰の條件たるロンドン條約においても明らかにされ、又また實際イタリアはアダルヤ、コンヤの保障占領すら行つたのである。從つて新興トルコとしてはイタリアに對し決して好感を有つてゐなかつたが、一九二八年に至り中立、仲裁々判條約が成立し、兩國關係は誤解を去つて親善の基礎の上に打建てられた。しかし一九三四年トルコがバルカン協商に加入するに及んで、ブルガリアと親善關係にあるイタリアとの關係は冷却した。そこへエチオピア戰爭が起り、トルコは聯盟の一員として對伊經濟制裁に參加、

兩國關係は益々惡化、イタリアはトルコの要求によつて開かれた一九三六年のモントルー會議にも參加を拒否した。しかしその後親善關係回復の希望が双方から起り、トルコはイタリアのエチオピア征服の實質的承認、イタリアは佛土間のアレキサンドレツタ問題につきトルコの立場支持によつて、兩國關係改善の第一歩を踏み出した、特に一九三七年一月の地中海現狀維持に關する英伊紳士協定の成立以來伊土兩國の接近は愈々軌道に乘り、同年二月のミランにおけるトルコ外相アラス氏とチアノ伊外相の會談となつた。しかしその後におけるイタリアの對獨接近、特にアルバニア征服の結果、兩國關係は惡化の儘第二次大戰を迎へた。

英國

第一次大戰に續く十數年間、英土關係は甚だしく冷淡なまゝ推移した。第一次大戰時

のガリポリ上陸作戰、トルコ獨立戰爭の際の英國のギリシヤ軍援助、大戰の結果たる英國のシリアの一部、メソポタミアの割取、トルコに不利なるモスール油田問題解決等が英土關係を冷淡ならしめたことはいふに及ばないが、更にトルコが共和國になつてから急に實行した過激な政策、例へばカリフの廢止、自由なる宗教政策の如きが、保守的なる英國の輿論に不評だつたことは止むを得ない。

しかしトルコ共和國が年月を重ね、着々更生の實を擧ぐるに及んで、英國の對土態度には徐々に變化の徴が現はれて來た。歷代駐土英國大使の本國政府の蒙を啓いた功績も、これと關連して注目しなければならぬ。またローザンヌ會議の結果、ギリシヤとトルコ間に住民交換協定が出來、これが實行されるに及んで希土兩國親善關係が確立したことはギリシヤの歷史的盟邦英國とトルコの關係接近に役立つた。而して英土兩國關係を根本的に改

善し、兩國が急速に接近をはじめたのはイタリアのエチオピア戰爭の結果、トルコもまた聯盟の一員として英佛の指導下に行はれた對伊制裁に參加した時にはじまる。蓋し兩國とも近東、東地中海方面の現狀維持を有利とし、これがイクリアの膨脹政策によつて脅かされたと感じたが故である。序でだがイタリアのエチオピア征服はこのほかにも近東、東地中海方面に重大なる影響を及し、その意義は著しく大である。後で述べるごとく英國とエヂプト國民運動の接近の如きも、これを契機とするものである。また一九二三年のローザンヌ會議の結果課せられたダーダネルス海峽の非武裝條件を撤回し、同海峽に對するトルコの主權確立は新興トルコ多年の念願であつたが、これまたイタリアの膨脹政策の脅威の下に、英ソ兩國がトルコを支持し、トルコの念願が達成されたのである。

一九三六年夏、英國王エドワード八世は地中海旅行の途次アンカラを訪問し、トルコ朝

野の大歡迎を受け、續いてこれに對する答禮としてトルコ艦隊はマルタ島のヴアレツタ港を訪問、以來兩國關係は親善强化の一路を辿り、政治的親善と相並び經濟的にもクレヂツトの提供、清算協定の實施その他の手段によつて兩國關係は緊密化して行つた。一九三七年五月の英國王戴冠式には當時の首相（現大統領）イスメツト・イノーニユー氏がトルコを代表して參列した。その後一九三九年アレクサンドレツタ問題がフランスの讓歩によつてトルコに有利に解決するに及んで、トルコと英佛の關係は密接不離のものとなり今回の大戰を迎へた。

三

トルコが列國に取つて重要視されるのはダーダネルス、ボスフオラス兩海峽の番人といふ地理的理由に基くものである。或る外交官はトルコ・マイナス・ダーダネルス・イク

オール零といつたが、それほどでないとしても、この海峽のお蔭でトルコの國際的地位はむしろ實力以上に高く評價されるのが常であつた。列强中でダーダネルスに最大の關心を示すものはロシアである。ロシアは黑海から自由に地中海へ出るため海峽の開放と平時、戰時の自由通過を國策とした。而してソ聯に劣らずこの問題に關心を示すのは、地中海を以て英帝國の大動脈と見做す英國で、これは海峽を閉塞してロシアを地中海から閉め出すことを最高政策としてゐた。前大戰の折もこの問題が採めて、一九一五年になつて初めて戰勝の場合ダーダネルスとコンスタンチノープルをロシアに與へる約束が成立した。

十八、九兩世紀、帝政ロシアは地中海への出口を見出すためダーダネルスに向つて押し進んで行つた。而してこれに反對するのが英佛土三國の方針で、その頂點をなすものがクリミア戰爭である。この海峽は一八四一年まではトルコの絶對主權の下にあつたが、それ

から一九一四年まではトルコの統制下にはあるが、種々の中立條項を加へられてゐた。第一次大戰終了後は聯合軍に占領され、ガリポリ半島はギリシアに與へられた。そして海峽は武裝を撤廢され、凡ゆる種類の航海に開放され、國際委員會の管理下におかれた。トルコ獨立戰爭後、ガリポリ半島はトルコに返還され一九二三年のローザンヌ會議では國際管理を著しく減じ海峽に對するトルコの主權を部分的に回復した。

ローザンス會議の時は聯合國のソ聯國內干涉のあとをうけて英佛とソ聯の間は著しく惡い時であつた。それにソ聯は黑海で艦隊らしい艦隊はもつてゐなかつた。英國はソ聯艦隊が地中海に出て來ることを恐れる必要がなかつた。そこでその傳統的政策を一擲して海峽の自由通過を要求、必要な時何時でも自國の艦隊を黑海に入れてソ聯を叩くことを考へてゐた。これに對しソ聯は英國艦隊が黑海に入つて來ることは極力避けたい事情にあつた。

その結果双方とも傳統的政策と逆の主張をしたが遂に英國側が勝を占めた。

一九三六年のモントルー會議では、海峽の再軍備、國際保障の廢止、國際管理委員會の廢止等によりトルコの主權を確立した。この會議當時は、ソ聯の實力が十三年前に比して著しく充實し、海峽問題に對する英ソの立場はその傳統的政策に立歸ることを要請してゐた。しかし當時、上昇の一路を辿りつゝあつたイタリアの勢力に對抗する意味で兩國の間には妥協が成立した。モントルー會議で決定した要項は

一、平時　商船の海峽通過は自由、軍艦は日中に限り許可、但し一萬トン以上の軍艦、潛水艦、航空母艦は例外

二、戰時　トルコが中立の場合、交戰國軍艦は通過し得ず、但し國際聯盟の決定履行を目的とするもの、またはトルコの加盟した相互援助條約履行を目的とするものはこの

限りにあらず、またトルコが交戰國の場合には、トルコの敵對國の商船には通過を許さず、敵對國のため軍隊、軍需品を輸送する中立國船に對しても同樣である。軍艦の通過如何はトルコの獨自の決定に委せる

と云ふのであつて、英ソの要求は一應これで折合つて今日に至つてゐる。

四

共和國成立後十八年間、トルコの對外政策はその國內建設の必要が要求するごとく、一貫した平和政策、もつとハツキリいへば不脅威、不侵畧の原則を基調としてゐる。トルコの必要なのは現狀維持である。今回の大戰勃發直後締結された英佛土三國協定によつて確立した親英、反獨伊政策のレーゾン・デートルは實にこの點にある。トルコとしては獨伊の膨脹政策は必然的に自國の存立を脅かすに至るものとして警戒して來たし、現在もその

警戒を益々強化して居る。これに反し彼等は、英國の意圖を平和的なものと認め、自國の存立を確保するためには英國と協同するのを得策とすると信じてゐる。

またリアル・ポリチツクの上からも英國との結びつきはトルコに取つて有利と彼等は信じてゐる。ドイツのバーター・システムによる經濟的支配强化政策をもつて、遂には自國の政治的獨立性をも脅かすものとして警戒するならば、國內建設に必要なる經濟的、技術的援助は他の國に求めなければならぬ。そのためにはソ聯か英米であるが、ソ聯に餘裕がなければ英米佛だけである。更にトルコの周圍を見渡しても、東地中海、近東における英勢力はまだ相當にシツカリしてをり容易にくづれない。

かうして英國のトルコにおける地位は、その親善關係樹立以來の歷史が新しいにも拘らず、相當に强いことを認めなければならない。

ソ聯との關係は一九三九年八月の獨ソ不侵略協定成立以來可なり冷却した。殊にボーランド、フインランド、バルト三國、ベツサラビア等の占領によつて明らかにされた侵略政策の復活は、トルコをしてダーダネルスに對する帝政ロシアの傳統的野心を想起させ、ソ聯の行動に對し警戒の念を抱かせるに至つた。なほこのほかソ聯がバクーに近接するトルコ領に領土的野心を有するとの說も可なり廣く行はれてゐる。しかしソ聯としては自國がダーダネルスを押へることが第一だが、若しこれが出來ないとすれば、ドイツの如き他國がこれを押へることはあくまで防がねばならぬ立場にある。蓋しドイツがこの海峽を押へトルコからイラン（こゝでは既にドイツ勢力が盛に入り込みつゝある）まで延長することはソ聯に對して重大なる脅威であるからである。こゝにソ聯がトルコの保全に重大關心を有つ理由がある。獨ソ兩國が共同の壓力をトルコに加へるごとき事態になれば、トルコと

して殆どこれを防ぐべき手段を持たないが、獨ソの對土共同政策は、その實現までに幾多の困難が存在する。而してこれが實現するまでトルコは現在政策を改めないであらう。

三、トルコ滯在雜記

イスタンブールの一流ホテル、パーク・ホテルはボスフオラス海峽を一目で見下すベラの高臺にある。展望の雄大な點でヨーロツパで有數なホテルであらう。筆者は友人の某君が偶々そこに泊つてゐたので、前以て無理に部屋を取つて貰つたが、避暑客やらルーマニアその他からの避難者が一杯で大變だつた。一九四〇年の七月のことだ。今頃もきつとブルガリアその他から追ひ出された英國系の避難者で滿員であらう。歐洲における大きな情勢の變化がこんなところにもマザ〳〵と反映してゐる。

當時はフランス屈服、ソ聯のベツサラビア侵入の直後であつた。英國が何日までガン張り得るか、ソ聯は次に如何なる手を打つかが關心の焦點を形作つてゐた。トルコの親英反

樞軸政策も大きなショックを受けた時であつた。しかし筆者がこゝで得た印象は、獨ソ英の複雑な勢力關係から見て、トルコは簡單にはドイツになびき得ないだらうといふことであつた。それに會つたトルコ人なども、ドイツの對英上陸作戰の可能性を疑問視するものが多かつた。あれから今日まで半年以上經つた。トルコの態度はまだあの當時の儘で大した變化がない。……

トルコといつても、日本人の多くはヨーロッパの數多くの小國の一つ位の漠然たる考へしか持たぬであらうが、行つて見ると日本に似たところが色々あつて、なか〳〵面白いところである。嘗て小亞細亞、バルカン、北アフリカにかけて廣大なオツトマン帝國を築いた輝かしい歴史を持つてゐる彼等は、自負心の強い負けぬ氣の國民である。嘗ての大帝國

時代の領土は次から次に奪ひ去られ、今では人口千六百萬の小さな國になつたが、大國時代の氣持だけはまだ殘つてゐる。それにケマル・アタチュルクの革命で、回教の代りに與へられたナショナリズムは、トルコこそは世界文明の根源であると強調してゐるので鼻息はなか〳〵荒い。

今日のトルコは日本の鹿鳴館時代の再現とでも評してよからうか。全く猛烈な西歐化の最中である。基和國になつてから十八年、時間的にいつても鹿鳴館時代に相當する頃である。トルコ革命が本當に成就するかしないかは、トルコ國民の機械文明に對する適應性如何が大きな問題である。現在までのところ、トルコ人は學ぶことは早いが、諒解するのはそんなに早くないと一般にいはれてゐる。何しろ一九二七年の調査では、國民の九十七パーセントまで文盲だつた。その後ラテン文字の採用で文盲數はドシ〳〵減じてゐるが、今

でも七十パーセント以上であらう。世界の文明國の域に達するのは、まだ〳〵前途遼遠である。

イスタンブールで日本的な食物が食へるのは嬉しいことだつた。夏のことで、西瓜はフンダンにあつた。唐もろこしも丁度日本と同様に道端で焼いて賣つてゐる。ホテルでは出してくれないので、散歩の途中道端で買つて、古い城壁の上に登つてトルコの鼻つたれ小僧共と並んでムシヤ〳〵食つた。實にうまかつた。尤も唐もろこしを焼いて食ふのはトルコに限らずエヂプトも同様である。またアラビア人の食べる大きなパンは唐もろこしで出來てゐる。

それから食物でも一つ忘れられないのは、チロスといふ日本のメザシのやうな乾魚である。これを焼いて食ふと、殆どメザシと變らない。トルコのチロスといへば、歐洲在住の日本人仲間では有名なもので、トルコに遊んだものは大抵カバンの底にしのばせて持つて行く。チロスをさかなにビールでも飲んで、友達と馬鹿話でもしてゐると、外國にゐるやうな氣はしない。食物はこれでいいとして、トルコの酒は一寸齒が立たぬ。ラツキーといつて、水で割ると牛乳のやうに白くなる。藥のやうな臭ひがあつてなれないとなか〳〵飲めた代物ではない。

三月はじめ日獨伊三國同盟に加入したブルガリアで日本の音樂が流行してゐることは既に日本にも傳へられてゐるが、日本音樂のもつ感傷的哀調が東洋的な血に呼びかけるのであらう。トルコではブルガリアのやうではないが、それでも「荒城の月」などよく普及し

てゐるやうだ。丁度筆者の泊つてゐる時、パーク・ホテルで大統領イノーニユー氏、首相サイダム氏など、トルコ政界の御歴々が晩餐會をやつたが、その折り音樂隊が第一番目に「荒城の月」をやつたといふので、スワ日土軍事同盟かと鼻の早い新聞記者諸君の第六感を刺激したのであつた。

日土軍事同盟などいへば笑はれさうだが、トルコの一部にはソ聯に對して備へる意味から、これを主張してゐるものもある。新聞などには時々軍事同盟締結論が現はれてゐる。ソ聯といふものを中間において考へると、日本とトルコの仲もそれほど遠いものではない世界政治の大きな背景の下で、トルコをもう一度見直す必要があらう。

イスタンブールは觀光地として素晴らしく大きな價値をもつてゐる。名所舊蹟は市内の

到るところに轉つてゐる。しかし他の事でもつと忙しいと見えて、この方面の整理まで手が廻りかねてゐるのが現狀である。全部殆どほつたらかしの狀態だ。「お菊さん」のピエル・ロチがこの町を愛して長く住んでゐたことは周知の事實だが、その家はチヤンと殘つてゐる。トロツキーも亡命時代にこの町に住んでゐたことがある。その家の女主人公はまだ生きてゐて、色々と思ひ出話を聞かせる。街のキヤバレーにはケマル・アタチユルクの「戀人」だつたと自稱する女もゐる。尤もアタチユルクのキヤバレー遊びは有名なものだつたから、彼を知つてゐる女が何人出て來ても驚くには當らない。歴史と獵奇の街コンスタンチノープルも、共和制になつてから獵奇の方は駄目で、有名なサルタンのハーレムも今は閉鎖して人に見せないが、歴史は懐しい言葉で遊子に呼びかける。

共和制になつてから今日までトルコの歩いて來た道はむしろ我武者羅とでも評してよからう。トルコの更生はドイツ、ソ聯の更生とも比較さるべきものである。アタチユルクの過激な政策は國内の少數民族クルド族の反亂を惹起し、また彼の暗殺計畫も生んだ。しかしそれはずつと昔のことである。共和制になつて一番重大な打擊を蒙つたのは回教の僧侶達であつたが、彼等ももうスツカリ諦らめてゐる。現在政府に對する反對派は殆ど無力といつてよからう。それに政府の最も大きな強味は、青年層が絶對的にこれを支持してゐることだ。特に國字をアラビア文字からラテン文字に切り替へて以來、若い連中は過去から切斷されたも同樣である。何故ならば、彼等には昔のアラビア文字でかいたものは讀めなくなつてゐるからである。それにトルコの經濟は目下大きく上昇のカーヴを畫いてをり、國家の當面する問題は如何にして人を見つけ出すかで、如何にして仕事を見つけ出すかである。

はない。政府としては國内の分裂を心配せずに前進が續けられる。これは大きな強味である。

筆者がベルリンからトルコに發つ時、友人達は病氣を心配して、キニーネやら胃腸の藥やら無理に持たせるのであつた。西ヨーロツパからバルカン近東方面へ行くのは、丁度われ〳〵が支那へ行くのと同樣な感じがする。卽ち如何にも半開地に行くやうな氣がするのである。トルコは共和制になるまへまではマラリアが多くて非常な不衞生國だつたが、共和制になつてから當局の懸命な努力で殆どマラリアは完全に退治した。御蔭でキニーネの厄介にはならずに濟んだが、イスタンブールでもまだ南京虫は隨分多いやうである。それにブヨよりももつと小さい粉見たいな虫がゐて、これに喰はれると、南京虫の場合のやう

にはれる。この虫は汽車の窓に張つてある金網などは平氣で突破して來るから始末が惡いイスタンブールからシリアへ拔ける途中など、三日三晩の長い汽車旅の間にこれにどれだけ苦しめられたことか。

四、エヂプトの國内動向

一

イタリアの參戰以來、エヂプトの地位は著しく各方面の注意を惹くに至つた。地中海の東の出口、スエズ運河を含むエヂプトの戰略的地位と、それから回敎の中心としての政治的地位の二つからである。この重要性にかんがみ、英國は本國の防備をそれだけ犧牲にしてもこの國を中心に數十萬の大軍を集めて、イングランド、エヂプト二正面作戰を圖り、エヂプト作戰に英國の防備と略々同樣の重要性を賦與してゐる。一方獨伊側も、イタリアのリビア、エチオピア方面よりする作戰が豫期の成功を收めないと見るや、共同作戰の擧に出で、既にドイツの精銳な機械化部隊が北アフリカ戰線にその勇姿を現はし伊軍と共同

して英近東軍と戰つてゐるほか、獨伊空軍も協力してゐる。

地圖を一目見れば判るとほり、この國は英本國と東洋、濠洲方面の自治領、植民地をつなぐ大動脈をなしてゐる。地中海經由の海路がさうであると共に、空路も同樣で、英本國南阿、印度は凡てこの地を中心として空から連絡してゐる。若しこの國の英國に對する重要性を完全に理解しようと思へば、獨伊兩國がそれを占領した曉を想像すればよろしい。卽ちその場合、英國の地中海航路は全然駄目になるであらうし、英本國と印度、濠洲の連絡は時間の費へる南阿廻り一本建てとなるであらう。また空路を南阿から一足飛びに印度に出るほかはなくなるであらう。イタリアの勢力はそのリビアと東アフリカ植民地（エチオピア、エリトレア、ソマリランド）を直接連絡することによつて印度洋の西岸に及ぶであらう（現在伊領東アフリカ植民地は空路リビア方面よりする以外、本國との連絡が全く

ない）。更に舊獨領東アフリカ植民地（タンガニーカ）方面も獨伊の手に入つて、英國のアフリカ植民地は崩壞の危機に直面するであらう。これらを考へ合はせると、エヂプトの持つ經濟的價値、卽ち棉花、食糧品以外に、その戰略的價値は實に素晴らしく大きいといはねばならぬ。

その上、エジプトは、トルコが共和制になつて政治と宗教を分離して以來、回教諸國の最も大きな中心となつてゐる。カイロには回教界の世界的中心であるアズハル大學があるが、このほかでもエジプトの回教徒に對する影響は大きい。ラジオ、新聞等の近代的宣傳機關はカイロが中心であるし、各種の書籍もこゝで印刷されて回教諸國に擴められる。エヂプトの若き國王ファルークなどラジオを通じて自國のみならず他國の回教徒にも呼びかけてゐる。

英國と獨伊の間にエヂプト爭奪戰が猛烈に行はれつゝあるのは誠に當然である。

二

大戰勃發以來エヂプトの國內動向は、その地位の重要性とゝもに著しく各方面に注目されてゐる。英國側では英埃同盟を誇示してその關係の緊密なことを宣傳するし、またイタリア側ではエヂプト國內の著しい對英不滿を指摘し、英埃關係が今にも決裂に瀕するかの如く度々傳へて來た。實情は果してどうなのか。

一九三九年九月、英國がドイツに對して宣戰を布告するや、エヂプトはドイツと外交關係を斷絶した。一九四〇年六月イタリアが參戰するや、同樣の擧に出た。しかし獨伊兩國に對して未だ宣戰を布告してゐないことを注意しなければならない。英埃同盟とはいひながら、エヂプトは自働的に參戰する義務はなく、たゞ戰時英國に種々の利便を供給すれば

よろしいことになつてゐる。卽ち一九三六年八月二十六日ロンドンで調印された英埃條約によれば、締結國の一國が戰爭に捲き込まれた場合、他の一國は同盟國の資格で直ちにその援助に赴くべきことが規定されてゐるが、同條約第七條によると、戰時エヂプト國王が英國王に對して與ふべきものは「エヂプト領內において、エヂプトの行政並に立法の組織に應じて、エヂプト國王の權力下にある凡ての利便及び援助」とあり、この中にはエヂプトの諸港、諸飛行場、通信機關並にかゝる利便並に援助を効果あらしむるために必要なる戒嚴令の施行、有効なる檢閱の實施等を含んでゐるが、自働的參戰の規定はない。

而して參戰問題については、エヂプト政府は一九四〇年六月十五日イタリア政府に通牒を送り、次の三つの場合にエヂプトが參戰すべき旨を明確にした。

一、伊軍がエヂプト領內に侵入した場合

二、伊軍がエヂプトの都市を爆撃した場合

三、伊軍がエヂプトの軍事施設を爆撃した場合

當時エヂプト内閣は反英的色彩の濃厚なアリ・マヘル内閣であつて、英國側の即時參戰要求に頑強に反對し、政變となり、その結果ハツサン・サブリ・パシヤの内閣が成立した（英國側が即時參戰を強要したとの說はその後英國側で正式に否定されたが、しかし現地では一般にさう信ぜられてゐる。）參戰問題はこの時以來エヂプト政界の懸案となつてゐる。イタリア空軍のアレキサンドリア爆撃はその目標が同港碇泊中の英國海軍であるといふので、右に擧げた三つの參戰條件の中に入らなかつたが、一九四〇年九月伊軍がリビアから前進してシヂ・バラーニまで進入するに及んで問題となり、宣戰を主張するサード黨（指導者は下院議長アーメット・マヘル・パシヤで、アリ・マヘル・パシヤの弟である。）

は閣内の自重論に押されて内閣から退却した。この時の自重論の根據はシヂ・バラーニはエヂプト領には違ひないが、しかし重要性の殆どない沙漠である。こんな所を守るため一國の存亡を賭するやうな戰爭參加はやめた方がよろしいといふにあつた。

先きに擧げた宣戰三條件は、この際も再確認された。その後ハツサン・サブリ・パシヤは十一月議會開會の國王のメツセーヂを朗讀中に急死を遂げ、フツセイン・シリー・パシヤがその後任となつたが、一方戰局はその後展開を示しイタリア軍がエヂプト領内から退却したゝめ參戰問題は一應小康の狀態である。何しろエヂプトは一九三六年の英埃條約の結果やつと自國の軍隊を持つことを許され、その後種々の調査に約一年を費した上、近代的軍隊の整備に乘出し、その實力は大體二萬そこそこと見られるので、エヂプトの參戰、不參戰は戰局の大勢に影響を及ぼすものでない。即ちエヂプトが參戰してもしなくても、

英國が負けるものなら負け、勝つものなら勝つのである。その意味で參戰問題は殆ど重要性がないともいへるが、問題はそこにはなくて、むしろこの參戰問題に集中的に表現された英埃關係、伊埃關係である。

三

リビアと東アフリカ植民地をつなぐことはファシスト・イタリアの熱望である。エチオピア征服前後からイタリアの對エヂプト工作は非常なる熱意をもつて押し進められて來たエヂプト前國王フアツドが親伊的な傾向の强かつたのは周知の事實で、また現國王フアルークも父の血をつぎ親伊的傾向が相當强いと一般に信ぜられてゐる。それにワフド黨を先頭とするエヂプト完全獨立要望の人々の間には、英國の橫暴に憤慨してこれと鬪ふ意味でイタリアと接近せんとする空氣があり、イタリアのエヂプト工作は可なり好望に見えて

來た。

これに對し英國は、一九三六年の英埃條約によつてエヂプトの完全獨立を名目上認め、一步後退と見せながらその實エヂプトの外交、政治、經濟の首根を依然としてシツカリ押へ、既成地盤の擁護に躍起の策動を行つた。エヂプトにおける伊英間の鞘當ては歐洲大戰勃發後特にひどくなり、イタリア公使マツツオリーニ伯と、英國大使マイルス・ランプソンの競爭は今でも人々の語り草となつてゐる。マツツオリーニ公使が首相に會ひに行くと直ぐその後でラシブソン大使が首相に會ひ、それが濟むとまたマツツオリーニ公使が出掛けるといつた具合で、彼等はまるで鼬鼠ごつこのやうな毎日を繰返してゐた。マツツオリーニ公使はエヂプトの對伊國交斷絕後約一週間後の六月二十三日になつてやつとカイロを出發し歸國の途についた。これは當時英國で問題となつた。

對エヂプト工作においてイタリアの弱味として一般に指摘されるのは、エヂプト在住イタリア人（その數は十萬以上に達する）の多くが中産階級以下で、小商人、機械工、自動車運轉手、床屋、飲食店經營者等で、エヂプトの同業者達と競爭の立場にあること、これらの多くがエヂプト生れのイタリア人で、嚴格なるファッショの訓練を受けてをらず、エヂプト人に輕く見られる傾向のあることである。（エヂプトが不平等條約廢棄に成功したのは英埃同盟成立の翌年、卽ち一九三七年のモントルー會議であつて、それまでは諸外國人は不平等條約の特權を享受するため、數代エヂプトに居住してもエジプトの國籍を取らないのが普通であつた。現在エヂプト在住のイタリア人の間には既に數代エヂプトで生活したものが可なり多い。）

これに反して英國は、國家の財政、經濟政策の根源を押へて、一般民衆のまへにその姿

を現はすことなく、一般民衆と競爭することなく、いはゞ影からエヂプトを支配してゐること、またエヂプト在住の英國人が何れも相當な連中で、イタリア人の場合のごとくエヂプト人に輕く見られることのないのが英國の對エヂプト政策の場合强味になつてゐる。

エヂプトの大資本がファッショ的獨裁達成のためイタリアとの接近を歡迎すべき立場にあることはいふまでもない。またエヂプトの知識階級が反ファッショの立場から英國を支持してゐることも同樣に明かである。問題は中產階級以下、特に國民の大部分を占める農民の立場である。これを明かにするには、農民階級の代辯者と見做されるワフド黨の動向を一瞥しなければならない。

四

エヂプト獨立運動のチャンピオンとしてわが國には御馴染の深いワフド黨は、その指導

者サード・ザグルールが一九二七年逝去して以來、ムスターフア・ナハス・パシヤ指導の下に今日に至つた。そしてザグルールの目的のうち外來帝國主義に對する鬪爭は一九三六年ムスターフア、ナハス・パシヤを代表とするエヂプト全權團と英國政府の間に締結された英埃同盟により一應達成された。英國が讓歩するに至つた最大の動機はイタリアの進出を防ぐためであつた。而して外來帝國主義に對する鬪爭と並行する國內鬪爭、卽ち國王とそれを取卷く一派の獨裁的傾向に對する鬪爭は依然として今後の問題として殘つてゐる。

英埃同盟成立後に行はれた總選擧には、徹底的な選擧干涉を受けたワフド黨は第一黨の地位から蹴落され、またマームウド・ノクラシ・パシヤ、アーメツド・マヘール・パシヤ等の有力分子が脫黨してサード黨を樹立するなど、黨勢は衰微の一路を辿つた。ナハス・パシヤは人格高潔を以て知られてゐるが、その政治的手腕は前任者ザグルールに遠く及ばず、しかも黨內に他の優秀なる指導者を有せず、昔年の影響力を失ひつゝあるのが現狀である。

今回の戰爭勃發後、ワフド黨は一九四〇年四月頃の如き英國政府に對する覺書を發表した。

一、エヂプトの對獨斷交と同時に宣言された「戒嚴狀態」を終結せしむること

二、英國政府が適當の値段でエヂプトの全棉花收穫を買上ぐべきか、またはエヂプトに對し凡ての國に棉花自由輸出を許可すべきこと

三、エヂプトを一般的平和交涉へ有效に參加せしむべきこと

四、英國政府は今回の戰爭終結と共に凡ての英國駐屯軍をエヂプトより撤退すべきこと

五、同時に、英埃スーダンの將來に關しエヂプト政府と交涉を開始すべきこと

このうち第二の點はその後一九四〇年八月、英國政府のエヂプト棉買上發表となつて一應解決したが、いふまでもなく農民の御機嫌取りである。

かうして一應その要求を出して今後の問題の所在を明らかにしておきながら、ワフド黨は現在微溫的ながら英國支持の立場にある。その表面の理由は『敵が苦境に立つてゐる時それを背後から衝くのは道德に反する』といふのであるが、その實際の理由は

一、エヂプト駐屯の英國軍が戰爭勃發以來著しく增强され、これに對する反抗は事實上不可能に近いこと

二、戰爭の見透しがハツキリせず、獨伊側の「絶對優勢」の宣傳に對し英國側も「最後の勝利」を宣傳し、現在の瞬間では果してどちらに賭けたがよいか判定困難なこと

三、イタリアのリビア、エチオピア等に對する政策から見て、イタリアの對エヂプト政策に懷疑の念を抱いてゐること、卽ちウカ〳〵すると現在よりもつと惡い狀態に逆戻りする可能性があると觀てゐること

四、國民運動の目標は名實ともエヂプトの獨立を完成することで、帝國主義支配はそれが英國産であれイタリア産であれ排擊しなければならず、イタリアに好意をもつとしても、それはイタリアが英國勢力を追拂つてエヂプトを完全な獨立國にしてくれる限りにおいてであつて、英國を追拂つてその代りにイタリアがエヂプトの主人公になることは歡迎し得ないこと

等によるものと信ぜられてゐる。

五

何といつても英國としてはエヂプトに實力を擁してゐることは絶對的な强味である。さ

うして實力を持つてゐなければ地位が危いといふのが絶對的な弱味である。長い間外國の支配下で暮してゐる間に、エヂプト人は奴隷的根性を強めた。長いものには捲かれろで、現在はさうする以外に仕様がないから英國を支持してゐる。しかし余り深入りし過ぎると英國が負けた場合に大變なことになる。「獨立國」の體面上、イタリアに對して參戰の條件を出したが、もちろん參戰などは好きでない。今まで散々虐められた英國を助けるために參戰などする必要が一體何處にあるか。尤も英國が本當に勝つといふことがハツキリしたら參戰しても損ではない。……これが一般のエヂプト人の打あけた肚の底であらうか。尤も中にはイタリアの勝に賭けるものもゐる。英國の勝に賭けるものもゐる（下院議長アーメツド・マヘル・パシヤの如く）。しかし今日の如き戰局の段階では、それらは大勢を引張つて行くに充分でない。かくてエヂプトの國內情勢は英國の宣傳の如く親英的でなく

またイタリアの宣傳の如く親伊的でもない。エヂプトはその國家的利益の命ずるところに從つて戰爭に深入りすることを避け、情勢の推移を靜觀せんとしつゝある。

五、エスマーの國

一、「エスマー」の國

パレスタイン、ジヤフアの郊外、リツダ飛行場からミスル航空會社（エヂプトの會社でブリチツシユ・オーヴアシーズ航空會社の子會社）の十二人乘小型機がカイロとの間を往復してゐる。カイロ行きの命令を受けてベルリンを出て一ケ月以上經つた八月十六日、筆者はこの飛行機で空からエヂプトに入つた。丁度イタリア軍の英領ソマリ占領の直後で、この附近の戰況が今にも動き出さうといふ時であつた。同乘の客は英近東軍の士官が大部分フランスの外交官も一人ゐた。士官連は眞赤な房のついた手頃な棒を持つてゐた。ステツキを持つて歩く英軍の將校のことだから、これもきつと參謀か何かの印であらうかと先づ

考へた。あとでこれが蠅を追ふ道具であることを發見していさゝかウンザリした。

リツダからの飛行機はジヤフアと新興のユダヤ人街テル・アヴイヴの上空を通つて海上に出、海岸づたひに進んで一度ポート・サイドに着陸、それから眞直ぐにカイロに飛ぶ。

夏の地中海の水は紺碧、丁度伊豆海岸の海水を想はせるごとく澄み切つてゐた。その當時イタリア空軍はアレキサンドリアをはじめハイフアも攻撃してゐた。勿論例外なしに夜間爆撃ではあつたが、晝間安全な飛行を續けてゐても何だか戰鬪區域に入つたやうで、落着かぬ氣がした。

ポートサイドの、沙漠の眞中の飛行場は實に暑かつた。エヂプト領に第一歩を印した譯である。パスポートの檢査がある。係官は筆者が新聞記者だといふと、暫く待つてゐてくれと一番あと廻しにした。新聞記者の入國には内務省の特別許可が入用なのである。しか